明治期戦争劇集成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日置貴之 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日置, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21580

壮絶 快絶 日清戦争

藤澤浅次郎　作

序幕

日清戦争
第壱　黄河口日本軍々営の場

出場人名

日本長官　陸軍少将　植嶋巌　大嶋寛
〃副官　同中佐　脇田　武田卓亮
〃伝令使　同中尉　山内　進
〃砲兵下士　高木卯太郎
〃　岩山喜久太
〃　江澤筒一
〃　浦野佐八郎
〃　山川　涼
兵卒　弐名
新聞記者　永澤恭二
婦人会総代　毛利慶子（堀）
〃　末松扶佐子（上田）
少婦春田の娘しげ
支那兵　弐名

黒龍江日軍々営の場（黄河口）

一本舞台平面に黒龍江を見せたる油画の書割。上手に「テント」を張りたる陣営にて後重りて幾重にも「テント」の陣営アリ。下手は支那風の白塀、椰子様の大なる立樹など、総て支那風黒龍江（黄河口）日軍々営の道具。茲に日軍将官大嶋寛（植嶋巌）、尉官、山内進、下手に炮兵四人居並び、分捕りの大炮二門に銃数十挺を検閲して居る。風の音、演習ラッパの音にて幕明く。

山　一昨日の開戦に分捕の銃器は委く揃ヒましたか。

兵一　ハイ、残らず揃ヒました。其処へ持ち運びました跡は陣営の後ろの原に大炮が六門と小銃弾薬七八千

発もムり升。

兵二　軍馬は二拾六頭繋ぎましたが、平常演習の出来て居ない事ですから、到底軍用には適しますまい。

兵三　殆ンド日本の乗合馬車の馬の様ですが、アンな馬に乗つて居て千軍万馬の往来を仕様とは、実に度胸のいゝ奴等だ。

兵四　どふか検閲を願ひ升、点数は悉皆書面にして差出しておきました。

山　ハヽア左様ですか。

ト大炮其他を点検する事在りて。

長官これ等の銃器は悉ク新式の者ですが、近頃当支那も余程兵器などの製造も心を用ひて居ると見得升ナア。

木植　ハア。当今は日本ノ村田銃ナドモ余程来テ居ルダラウガ、イクラ兵器ガ利器デ在ツテモ仕用スル人ガ無クテハ無駄ナ事ダ。彼奴等ハ矢張手切庖丁ヤ青龍刀ガ相応だア。

山　何ニシテモ開戦以来、連戦連勝ヲ占メ尚ホ海軍ノ方モ今日等ハ天津沖ニ進軍ノ報ガアリマシヨウガ、我ガ陸軍モ益々進ンデ海軍ニ先ツテ北京ニ進撃仕度イ者デス。

木植　ムヽ、香港ノ旅団長カラ令ニ接シタラ、今晩ニモ進軍仕ヨウガ、コノ黒龍江ハ要害第一ノ場所ダカラ、軽々ニ引払ふ事ハ出来ン。

兵一　然シ一昨日ノ野戦ニ敵ノ地雷火ヲ発見シテ、我ヨリ導火線ニ火ヲ差シテ返ツテ彼レヲ討ツタノハ、全ク愉快デした。

兵二　アノ時長官ノ命ヲ受ケテ導火線ヲ探索ニ行ツタノハ、我輩ダガ、僕ガアレハ発見シタノガ我軍大勝利ノ原因ダナ。

兵三　ヨイ〳〵君、アノ線ヲ発見シタノハ君ジヤナイ、僕ダ。君ハ只ダアノ堤ノ後ヲマゴ〳〵仕テ居タ斗リダ。僕ナンゾハ樹ノ根、岩ノ隅ニ至ルマデ採掘シテ漸ク火線ヲ探シ当テタンダ。

兵二　馬鹿ア云フナ君。何だか婦人ヲ助ケテヤルト力、出ツラニ中隊の輸卒ト頻リニ話シテ居タジヤアナイカ。

兵三　ヤア、失敬ナ事ヲ云ナ。アレハ何ダ。

兵二　ナンダ。

兵三　其、何ダ。

兵二　アレ見給ヒ、ドウダ。
兵三　ヤア貴様ハツマラナイ事ヰリ云フ男ダ。
トムツトスル。これを山内制シテ。
山　コレ〳〵何ヲ下ラヌ事ヲ云ツテ居ル。ソレヨリモ何時進軍ノ令ガ在ルカモ知レンカラ、銃ノ掃除デモスルガイヽ。
兵皆々　ハイ。
トコレニテ皆々、分捕者ヲ片付ケ、銃器ノ掃除ニカヽル。折柄風音ニナリ、下手ヨリ（兵五）壱人走リ出デ。
兵五　上官、只今第一営ヘ日本婦人ガ見エ升カラ、誰カト問ヒマシタラ、兼テ通知ノ在ツタ日本赤十字社ノ婦人慈善会員カラ惣代に撰出ニナツテ慰問ノタメ着サレタ婦人方ダソウデス。
山　ム、ソレデハ先日通知ノ婦人総代ダナ。長官ドウシマシヨウ。
大　ヲヽ、茲ヘ案内ナサイ。
兵五　ハツ。
ト下手ヘ入リ、直ニ下手ヨリ日本婦人慈善会員総代毛利（堀）慶子、末松（上田）扶佐子、跡ヨリ前ノ兵士其他二人ニテ竹長持ニ贈る品ヲ担ギ付添ヒ出来リ。
長官ノ本営ハアレデムリ升。
毛（堀）　ハイ、左様デムリ升か。
ト会話シテ入ル。山内中尉ハ立ツテ之レヲ迎フ。
毛（堀）　妾ハ日本赤十社婦人慈善会員ノ毛利慶子ト申者デムリ升ガ、今度ノ日清開戦ニ就キマシテ、出役ノ将師及ビ各旅団ノ軍隊方ニ対シマシテ、些か御慰労申度キ為メ、不肖妾共両人総代ニ撰マレマシテ、参リ升テムリ升。
末（上）　妾ハ同ジク末松扶佐子ト申升テ、共ニ総代ノ任ヲ負フテ参リ升テムリ升。就キマシテハ、コノ品ハ慈善会員ノ寄贈品デムリ升ガ、甚ダ些少乍ラ各隊方エ御分チ下サイ升様願ヒ升。
毛　又金員ハ為換デ司計部ヘ差廻しテムリ升カラ、宜敷御伝達ヲ願ヒマス。
山　ア左様デムリ升カ。ドウカコチラエ。
ト案内シテ正面宜キ所エ軍隊用ノ椅子ヲ出シテ両人ヲ迎フ。両人コヽニ住フ。長官、

太植　少将ハ立礼シテ。

赤十字社慈善会総代トシテ態々御出張御慰問は、忝し〳〵。御厚志深々謝ス所デムリ升。早速御贈リ品ハ各隊ヘ別ツテ、御厚志ヲ伝エル事デムリ升。

毛堀　ハイ、先ヅ何ヨリ長官ノあなた以下、部下ノ隊中ニモ御健康ノ御様子ニテ、我国ノ為メ誠ニ嬉シイ事デムリ升。

太植　イヤ、吾々ノ健康ハ皇祖則チ日本万神ノ護リ給フ所デスカラ、毫モ気遣ヒハ有リマセン。火ニモ焼ケズ、水ニモ溺レズ、仮令敵の銃丸ニ触レテモ、勇気金鉄ノ我兵ノ肌ニハ貫ク事ハ在リマセンカラ、御安心ナスツテ御帰朝ノ上、かしこき辺ヨリ下万民ニモ御伝エ下サイマシ。

毛堀　御勇気ノ程、実ニ感心致しマシタ。

末上　ソレ承リマシテ帰朝致シマスノガ何ヨリ国民ノ悦ブ事デ御座リ升。

山　ソレヨリモ先ヅ御両夫人ハ遠路ノ所、曽ツ交戦中ノ国エ御婦人の身トシテ見レバ、別段従者モナク単身ニテ御出デハ、男子モ及バヌ勇壮ハ殆ンド感ジ入た事デスナア。

毛堀　イヱ、妾共モ男子デ在レバ従軍ヲ願テヾモ国恩ノ万分一ヲ報ジ度う厶り升ガ、不甲斐ない女性ですから、ソレサイモ及ビマセンカラ、せめてコノ伍十御用ヲ勤メマスルハ当然ノ事デムリ升。

末上　ドウカコノ上何ナリトモ、御用ガ御在いマスレバ、仰セツケテ下サイマセ。只今長官ノ勇気ヲ承リマシテ、殆ンド長途ノ労レモ忘レマシタ。

山　然シ先ヅ営中デ休息シテハ如何デス。

大　厶、ソレデハ営中デ尚戦況モ申上ませう。

毛　ソレデハ御免ヲ蒙り升。

山　ヲイ、ソノ寄贈品ヲ調査して各隊を分ツがいゝ。

兵一　ハイ。かしこまり升た。

ト大しま長官初メ山内、毛堀利、末上田松両夫人ハ「テント」の内へ入ル。兵卒は皆々寄贈品を担いで陣営の後へ入る。跡、唐模様の鳴物になり、向ふより支那兵二人、支那服を着たる日本娘春田しげ子を捕へ出来り、宜き程にて。

支兵一　あなた日本娘アリ升。何処行き升か。大変怪しい。その箱、何在り升。

〃二　嘘つく宜しくない。服支那、顔日本、怪い〳〵。

春　イヱ、妾しは決して怪い（ママ）ゝ者ではありません。此間迄この先の市街で雑貨の商ひお仕て居ました物ですが、此度の戦争で家を焼かれて仕まいましたから、北京に居る親達を尋ねて行く者でござい升から、どうぞかんにんして下さい升。

支一　イヱ〳〵それいけません。今戦争中、日本人中〳〵通す事出来ません。あなた探偵〳〵。

春　イヱ〳〵そんな者では在りません。

支二　その箱見せるよろしい。

トこれにてしげ子の持つて居る支那かばんを開いてみると、中に日本の着類、金銭、売残りの雑貨入れある。これにて支那兵二人は顔合せ、これを奪ふといふ思入れ在つて。

支一　あなた成程、雑貨商よろしい。私し許します。その代り、このはこ呉れるよろしい。

春　ア、どういたしまして。これは私の命の親、この中には路用の金もはいつて居升から、これおとられましては、どこへ行く事も出来ません。

支二　それ知りません。早くだすよろしい。出すない、支那陣所つれ行く。はやくだすよろしい。

ト無理にかばんお取らうとする。しげ子はこれお支へ乍ら舞台へ来る。此時下手ヨリ秋津新報記水澤恭二、草鞋掛け従軍記者の拵へにて出来り、これを見て直ぐに支那人壱人を突退け、壱人に短銃お向ける。これにて支那兵二人おどろいて下手へ逃げて入る。跡思入在つて。

水　茲我軍の陣営近い所だに、支那兵の狼藉は不届き千万だ。ヤア、見れば支那服は着ラるルガ、日本婦人の様ダ。全体おまいさんはどこの人だ。

春　ハイ、私は黒龍江近辺で雑貨商お仕て居り升、春田しげと申者でムり升が、先年父母とも商用で北京へまいりまして、私一人留守宅お守つて居り升したが、先達よりの戦争でとう〳〵家はやかれて仕舞まして、私一人致しかたがムりませんから、北京の父母を尋ねて参り升うと思ひまして、途中で参り升たらば、先刻の支那兵に捕られまして、既にこの革提迄奪われる所でムり升た。

水　ムヽそれはあぶない所だつた。マア、宜い所へ僕が来た。エヽそんな事なら、今の支那兵一撃に打ち殺してやればよかつた。然し、北京まで行くのは、未だ〳〵中〳〵とても娘の身で交戦中といゝ、到底此儘では行かれまいが、幸ひ茲は我軍営だから、マア茲でよく〳〵聞言（ママ）して保護お仕て貰ひがいゝ。

春　ヘエ、そんなら茲が日本の陣営でムり升たか。エヽありがとうムり升。

水　そんなら今案内して上げよふ。

ト水澤営中へツカ〳〵と入ろうとする。此時、「テント」の中より以前の兵一、兵二、出来り、水澤の前に一寸立塞り、水澤なるお認め。

兵一　あなたでしたか。

水　ハイ、水澤恭二です。

兵二　ヲヤ、アノ女は。

水　アリヤ今茲へ来ル途中で支那兵の為めに困しめられて居たから、連れて来ましたが、日本の雑貨商だそうですが、親達は北京へ行つた留主中、兵火で家おやかれたから、北京へ父母お尋ねて行くのだそうで、実に可愛想ですから、どうか保護お仕て遣つて貰ひたい者です。

兵一　左様ですか。それでは隊長に通しませう。

トいふと、「テント」の内より前の山内中尉出来り。

山　ナニ、婦人ですと。ヲヽ水澤君か。何です。

水　今も申した通り、日本人ですが、例の支那兵が暴行に罹つて居たのです。

山　ムヽ可愛想に。よし〳〵保護お与へて遣う。そふしておまへは長くこちらへ来て居るのか。

春　ハイ、一昨年渡航いたしました。

山　そふして父母は在るのか。

春　ハイ、父母も兄も厶り升たが、兄は先達て日軍へ従ひまして、運輸役を勤メ升ましたが、十日斗り前の戦ひに打死をいたしまして厶り升。

山　なに、兄は従軍をして戦死したか。ムヽ。

ト此時、又々「テント」の中より前の毛利（堀）、末松（上田）の両夫人出来り。

毛　今聞けば日本婦人が来たとの事。様子は慨略きゝましたが、兄ガ戦死を仕たとあらば、尚更捨てゝはお

けぬ者。様子に依ては私共が預つてやりませう。

未　ヲヽ見ればアノ胸に在るのは、赤十字社の徽章では在りませんか。

春　ハイ、これは如何にも日本の赤十字社の社員章でムり升。

毛　それではあなたは赤十字社の社員ですか。

春　ハイ、未だ本国に居り升た頃より、学校の教員より誘導を受けまして、不肖乍ら入社致しましてムり升る。

毛　ヲヽそふ聞く上は、これからは私共が引取つて、急度日本へ連れ申升から、決して心配はなさいますな。

春　ハイ、在難うはムり升が、私は未だ北京に居る父母の様子を聞ませねば、帰朝はいたされませぬ。

山　ムヽそれではこれより北京に行き、父母を尋ぬる心得ですか。

春　ハイ、仮令途中は支那兵に捕らて命を取られましても。

皆々　ムヽ。

ト感心のこなし。

水　そうしてあなたは北京にも居た事はあり升か。

春　ハイ、北京にも半年斗りおり升た。

水　それでは粗ぼ様子も知れませうガ、実は僕の友人、帝国新聞の記者比良田鉄哉といふ者が居り升から、これに申通じて置き升から、急度あなたの保護おさせま升う。

春　それは何より在難うムり升。

毛　どうか左様して上て下さいまし。尚私よりも社員として充分の保護おいたしませう。

春　それで私も心丈夫になりましたから、これから直ぐに出立おいたし升る。

ト立上る。これと同時に砲声聞へ、進軍の喇叭頻りに聞える。皆々キツトナル切つ掛けに、向ふより陸軍中佐武田貞亮、軍装勇しく指揮旗お持ち出来り、「テント」の内より前の大嶌少将、兵士皆々舞台へ居並ぶ。

武　長官〳〵本営から北京へ進軍の令が来ました。

大脇田武　ヲヽ進軍が。ムヽ本隊も直ぐに令を伝へよふ。シテ、未だ御報申すは今朝本営よりの伝達に、今度我本国天皇陛下ヨリ出師の各旅団へ忝くも御慰問として、数万の巻煙草お下しおかれたる旨、通報が在

升した。

大武脇　ナニ、陛下より御慰問を忝ふしたか。

　　ハイ。

大毛堀　ム、伝令使、各旅団へ聖恩を御伝ひ下さい。

　　ヲ、それでは陛下ヨリモ御恩賜ガ。

末　　いつにかわらぬ聖意のかしこさ。

水　　実に感佩いたし升た。

　　ト此時、又々進軍のラッパ烈しくなる。これにて皆々立上り。

大　　進軍の号令。

山　　ハッ。

　　トラッパヲ吹く。これと同時、上手ヨリ兵卒、軍馬お引出す。皆々勇ましき用意、炮声烈しくドンチヤン様の鳴物にて幕。

二幕目

日清戦争

二幕目　北京城外関門の場

作者
藤澤浅次郎

出場人名

新聞記者　比良田鉄哉
清官　閔致憲
〃　李申達
〃　李源達
日清貿易学校生徒　後藤基蔵
〃　脇坂甚太郎
春田しげ子
仕出し大勢
日兵　加藤清太郎
〃　小西行蔵
軍医　熊坂亮貞

日兵壱人
支那兵壱人

北京城外関門の場

本舞台平、正面に支那風の関門上下とも高き塗塀を少し下手へ向け斜に見せ、この向ふ城壁の遠見。異様なる旗差し物あり。舞台下手に支那人の仕出し大勢。中に日本日清貿易学校生徒後藤基蔵、脇坂甚太郎住居、上手に関門の守吏、李源達立掛り居る。楽様の鳴物にて幕明く。

後　ヲイ〳〵至急の要用が有つて通行する者だから、開けよといふに。

源　イヱ、時間が来ません、明ける事出来ません。

脇　明ける事が出来ない。生意気な事をいふな、コノ、チヤン〳〵奴。

後　達つて明けないと、なぐり倒すぞ。

源　乱暴いけません。九時に必らず明けます。それ迄は支那政府厳命あります。一人も通す事出来ません。

脇　ヱ、愚図〳〵いふな。叩き殺して通れ〳〵。

ト両人立掛ろうとする。此時、向ふより帝国新聞記者比良田鉄哉、旅装にて出来り、此の中へ入り。

比　マア〳〵暫らく御待ちなさい。

後　ヤア、君は本邦人だが、何んで止めます。

脇　我国民の腕力を見よ。打ち潰して通れ〳〵。

比　マア〳〵そりやいけない。時間が来れば明るといふのだから、彼れの法は法として置がいゝ。

後　デモ、近頃は非常に日本人が北京に入る事を忌むのみか、成規の往来券を所持する者でも日本人と見ると、斗や角云ふと聞くから、吾々が腕力を以て宜しく通つて遣るがいゝ。

比　デモ、強ち絶体的に通れないといふ訳じやない。時間が来れば開けると云ふのだから、それを粗暴な事をするのは、宜くない。殊に吾々は特別の往来券を清国政府から受け取つて居る局外者の新聞記者だ。

脇　吾々もそれは日本領事迄通行すべき往来券を持つて居るのだ。

後　ヂヤ仕方がない、待つて遣ろう。

ト皆々静まる。比良田は時計を出し見て。

比　ム、最う既に九時になつて居る。

ト云ふ内、上手より清国警官関致憲、清国官吏の拵らへにて出来り、直ぐに下官に命じて関門を開かしむ。是にて後藤、脇坂を初め仕出し皆〳〵先を争ふて一々切符を示して入る。関は一々切符を改める事宜しく、此件の内鳴物になり、下手より乗馬にて清官李申達出来り。

申　李鴻章閣下より厳達です。

関　ナニ、厳達とは。

申　コノ令書を御覧下さい。

関　ナニ、是は日清の交戦益々切迫したるより、特別券を所持の者の外、日本人の入京を許さないと云ふ命令ですな。

申　そうです。其上近来婦人にて秘密探偵を為す者在る由ですから、充分の御注意が肝要です。

関　ハア、承知しました。

ト此内最前より待ち居たる前幕の春田しげ子、切符を出して関門を入ふとする。李源達、是れを止めて。

源　あなた、最う通る事出来ません。

春　ハイ、通る事の出来ませんとは、如何いふ訳でムり升。

関　政府からの命令です。通る事出来ません。

春　ヱ、そんなら今迄通行の出来ました、此の関門が通る事出来ませんか。

源　ハイ、素よりです。殊に見れば日本婦人と見受け升が、尚更いけません。

ト是にてしげ子は本意なきこなしにて。

春　ヱ、情けない。それでは最う逢ふ事は出来ませんか。

関　素よりです。

春　アヽ申、成程そふいふ訳では御尤でムり升が、茲の所を聞分けて下さいまし。私は北京に親共が参つて居り升て、今私が参りませねば、再び逢ふ事が出来ません。どふぞ御情けでムり升から、僅か一分か二分の違ひ、未だ御達しのない内と御観しめして御通しなすつて下さいまし。お願ひでムります。

関　いけません。仮令どんな事があつてもいけません。

春　そりや、どの様に願いましても、通しては下さいませんか。

申　到底いけません。断念なさいまし。

ト是にて繁子はハツト泣き伏す。此内最前より下手に新聞記者比良田鉄哉、之れを聞き居り、不便なる思入れにてジツト思入れ。前へ出テ、閔氏に向ひ。

比　僕は日本帝国新聞記者、比良田鉄哉と云ふ者ですが、予て貴国政府から通行の特別券が在る。

閔　ハア、宜しふムり升。

比　左様して、是は我輩の妹ですが、特別券に在る通り、随行員として引通れ升。

閔　デハ、是れが随行員ですか。

比　ハイ。ヲイ妹、早く北京に行つて、通信事務を取うか。

ト春田しげ子の方を見返へり、思入にて呑み込ます。しげ子はサテハと云ふ思入にて、嬉しきこなし。トゞ思入あつて。

春　ハイ、夫では兄さん、参り升う。

ト立上る。比良田はニツコリ思入れ。しげ子の手を取るを切つかけ、清国官吏は皆〳〵あきれたる思入れ。両人はヅヽト関門を通り抜ける。此模様宜しく時太鼓の音にて幕。

引返し本舞台平、向ふ原野の遠見、薮畳など宜しく北京城門内原野の道具。茲に日兵加藤清太郎、小西行蔵、軍旅の拵へにて出来り。

加　時に小西くんも僕も、斯ふして従軍して来たが、漸く吾〳〵の目的通り、黄河口を初め平壌、義州の戦に全勝を占め、斯く北京近く乗込んだ上は、最ふ天下に敵なしだな。

小　左様とも〳〵。夫も全体、僕が朝鮮初め支那、内地の地理に明るいから、君も共々無事に茲迄進撃が出来たと云ふものだ。

加　ヲヤ〳〵君はイヤニ手柄顔をするが、元来君は成程朝鮮や支那の地理は少し位知つてるだろう。夫れは君は元と薬屋の手代で、渡航をした事が有るそふだから、然し戦争には少しも経験の無い商人だ。僕は苟も熊本県の士族で、明治十年西南の役にも軍功を奏した軍人だ。此間の開戦にも、君はあの大きな豚尾に引捕まつて居る所を、僕が横合から飛び込んで助けたから、今日迄其首が胴にクツ付て居るんだア。

小　ヲヤ、君はこんな海外へ来て迄、人の恥を云ふか。ヤア、友達甲斐がないじやアないか。成程、君は腕力は在ろうが、元来君は突飛でいかん。道も知らないで此間もアの沼の中へ足を踏み込んで九死一生の声を出して、僕を呼んだじやアないか。

加　ホンニ云へば五分〳〵だ。こんな他国で同胞が争つても詰まらないから、最う茲迄。進軍したら我軍の勝利は請合だから、マア前祝ひに一杯やろうか。

小　ム、成程そふだ。ヲイ君一件はあるか。

加　酒か。有る〳〵。

ト是より両人腰をかけて、小瓶の酒を汲み交し居る。折柄下手より支那兵一人来り、突然銃にて加藤を打つ。今一発小西を打ふとすると、小西は驚き逃げんとする。支兵は追ひ詰めんトシ、トヾ小西は支兵と奮闘ス。此時後の薮畳より一人の日兵来り、此の体を見て突然支那兵を打つ。これにて支那兵ウント倒れ死す。日兵は是れにて支那兵が奪ひたる金を取り返し、上手へ入る。跡に手負の加藤残り、苦しみ居る所へ、日軍々医長熊坂亮貞出来り、是れと赤十字社救恤委員にて手負を種々介抱する件宜しく在つて、トヾ加藤を銃にて担ぎ去る所にて幕。

紙数表紙共九枚

三幕目

日清戦争

第参　支那中央電信局の場

出場人名

支那電信局夫　金買基
新聞記者　比良田鉄哉
〃　水澤恭二
春田しげ子
米国人　某
日本兵　大ぜゐ
支那兵　大ぜゐ

支那中央電信局の場

本舞台常足の弐重にて奥へ引込まして、一面西洋風の家作り、正面に西洋形窓、此処より電信頼む所。下手の方、椅子テーブルヲ並べ待合所アリ。総て支那中央電信局頼信口の体。茲に仕出しの支那頼信人弐人、電信を頼依して居る。これを電信官吏金買基、応答なして居る。下手待合所に日本新聞記者、前幕の比良田鉄哉、水澤恭二の弐人、電文を認め居る。時計の音にて幕明く。

後　ヲイ〳〵至急の要用が有つて通行す

比　ハイ。ヲイ妹、早く北京に行つて、通信事務を取うか。ト春田しげ子の方を見返へり、思入にて呑み込ます。しげ子はサテハと云ふ思入にて、嬉しきこなし。トゞ思入あつて。

春　ハイ、夫では兄さん、参り升う。ト立上る。比良田はニツコリ思入れ。しげ子の手を取るを切つかけ、清国官吏は皆〳〵あきれたる思入れ。両人はヅヽト関門を通り抜ける。此模様宜しく時太鼓の音にて幕明く。

金　宜しい〳〵。電信沢山在り升から、早く仕て下さい。

仕　今最う一つ頼み升。ト電信を依頼する事在りて入る。跡、比良田頼信口に来り。

比　頼み升〳〵。

トこれにて金は電文を見て、暗号なるより。

金　あなたこれ、電文、暗号在り升か。

比　ハイ、暗号です。

金　暗号いけません。支那政府、暗号発[電]信禁じ升た。

比　ナニ、暗号禁じた。デモ、私は日本の帝国新聞の記者で、特別の通信をする者ですから、暗号でないと非常に長文に成つて困難ですから、是非願ひ度いです。

金　いけません。仮令あなたが新聞記者でも、支那政府よりは新聞記者に限つて特別の取扱をせよとの諭達は在りません。暗号は断然いけません。

比　困つたマア。デモ既に暗号でかいて仕舞た。ですから、今度に限つて誠と至急を要する場合ですから、ネー。

金　いけません。通常文にお直しなさい。

トこれにて比良田は仕方ない通常文にかき直す。

比　仕方がないナア。がんこな奴だ。ヲイ〳〵水澤〳〵、暗号はいけないとよ。

水　ナニ、暗号電信は取らんか。困つたなア。僕も暗号でかいて仕舞つた。それでは又書直しか。

比　実はこれお通常文に直すと、非常の長文に成つて電信料が大変だ。

水　実は僕の社は当時非常に財政困難だから、充分の旅費も送てくれないのだから、これから一々通常電信文で発電しては、通信料がたまらない。

比　それ斗りじやない。忽ち秘密が他社へもれて、何の功力も無くなるは。

水　困つたナア。いけないかナア。然しそんな事をいつて居る内、時間が後きて、又他社に魁されてはならんぞ。

比　ヱヽ仕方がない、直そふ〳〵。

水　ジヤ、僕もまたやり直しだ。

ト両人電文を直し終り、比良田又頼信口にて。

比　じや、通常文に直しました。

トこれにて金は電信文を受取り。

金　こん朝日軍に入る。清軍大敗。死傷千五六百ばかり。

ト半分読みかけ、立服のこなしにて。

あなた、これはいけません〳〵。これ電文かけませ

ん。

比　ヲヤ、何故かけませんか。

金　日本記者、嘘吐く、よろしくない。今朝軍、支那敗けありません。死傷千五百在りません。

比　これはけしからんネ。何も電信局吏が頼信者の電文に関渉する理由は在りません。仮令伝聞に如何の事が在ろう共、電信規則に違背仕ない以上は差支ない筈です。但し日軍の勝報を発電する事を、支那政府から止めましたか。

水　殊に吾々は局外者で在るから、通信の自由を妨げられる事はない。

比　元より電文の如何に依りて、通信の取扱を仕ないといふ筈は在り升まい。

金　何といつてもこんな電文、掛けません、支那国恥辱になります。

　　トこれにて比良田はムツトして。

比　ヲヤ〳〵これは怪しい。あなた、支那政府の恥辱と云ふ事知つて居升か。イヤ、貴様、恥といふ事知つて居るのか、コノチヤン〳〵め。

　　トヅカ〳〵と行ふとする。これにて水澤はソツト比良田の袖ヲ引キ、何かさや〳〵。

　　比良田もニツコリ思入れ。ポツケトヨリ銀貨ヲ出して窓の口より金の手に握らし。

比　あなた、この電文は至急の要件ですから、是非願ひ度いです。

　　トこれにて金は銀貨をハツトながめて、急ににこ〳〵して。

金　ハヽアこれよろしい。直ぐ掛けます。

　　ト比良田、仕すましたりといふ思入れにて、電文を追イ出して依頼する。此内、水澤は自分の発信の急ぐこなしにて、比良田の後ろにたち。

水　ヲイ〳〵比良田〳〵。僕にも掛けさしてくれ。急ぐ〳〵。少し代つて呉れ。

比　馬鹿ア云へ。未だ〳〵僕のは大変有るぞ。

水　大変有るつて、我輩の通信も急じやないか。

比　君も急ぐつて。僕だつて急々、それは同前だ。

水　同様ならば我輩にも譲つてくれ。

比　デモ、僕が先口だ。僕の頼信の切れる迄は、我輩の者だ。

水　それじや困る。ナアヨー君、少し代れよう。
比　マア〳〵待て。
　ト水澤は少しジレ込み、一策を案じ、表に掛けて有る半鐘を打ち鳴し、「大変だ〳〵」トさわぐ。
水　ヲイ〳〵比良田、大変だ〳〵。開戦だぞ〳〵。
　トこれにて比良田、驚りして表へ飛び出す。此内水澤は頼信口へ自分の頼信を持ち行き、又銀貨を出して依頼する。比良田は表の何事もなきを見て帰り、この在様を見て。
比　ヲイ〳〵謀計に掛けやがつタネ。
水　マア〳〵許して置け。非常の場合だ。
　ト此内、本鉄炮の音して、窓の内俄かに騒々しくなる。
金　最う発電出来ません。電線切れました。
水　電線が切れた。比良田、電線が切れたとよ。
比　ナニ、いよ〳〵開戦か。
金　電報はいけません。
水　比良田、最う電報はかけられんとよ。
比　電報が……。ナニ、貴様又嘘お吐きやがる。
　ト依頼口へ来り。
比　ヲイ〳〵、頼み升〳〵。
金　いけない〳〵。
比　今度は本とうにいけないか。
　ト此内炮声烈しくなり、電信官吏皆々逃げ出す。記者両人、キットなるを切つかけ、浅黄幕振落す。

　浅黄幕ふり落すと、一面の野原。向ふ山々を見たる遠見。所々支那風に陣所、旗などの書割。始終炮煙の往来アリ。茲に前の水澤恭二、足に疵を受け、これを前幕の春田しげ子、介抱を仕て居る。

春　最少しは痛みは止りましたか。御歩行は出来升か。
水　ハイ、有難う御ざい升。ナニ、大丈夫でムり升。何分、戦争の実況を看よふと思ひまして、ツイ流丸に当り升たが、ナアニこれしきに歩行の出来ない様じや、軍中の往来は山々出来ません。
春　マア、御あぶない事でムり升た。然しマア、私もいゝ所でおめにかゝりました。

水　時にあなたは、あの黒龍江でお眼にかゝりました後、どうして単身でこの北京へおこしでした。

春　サア、それを御話し申せば、不思儀な事で御座り升。実は北京の入口の関門で既に日本人の通行を禁じまして、到底も入京は出来ません所を、計らず特別券を御持参の我国の方に出合ひ、その御方が私を妹と偽つて御通し下さいましたが、其お方はあなたが兼て私に尋ねてと仰せの比良田鉄哉様といふ御方でムり升た。

水　ナニ、それでは比良田があなたを助けましたか。

春　これも全くあなたの御蔭。それから北京へ参り升して、父母を尋ねましたが、不幸な私の身の上。父は先日、支那兵の狼藉のために既に命を取られました。

水　ヱ、そんなら、その父上までも支那兵の為めに討たれましたか。

春　ハイ。それ故今は其世に居て孝行すべき人もなく、何の楽しみ御座りませねば、最う此上は御国の為め、せめては何ぞの御用に立ち、又一つには父兄の仇、女ながらも叶わぬまで、御味方の役に立ち、討死いたす心得でムり升る。それ故茲まで参り升た。

水　ムゝ天晴なる心掛け。それではこれより旅団に参り、その比良田にも逢つた上、万事あなたの保護を頼みませう。

春　何分宜敷う御願ひ申升る。

ト此時又々炮声聞え、上手より前の比良田鉄哉来り、水澤を見て。

比　ヲ、水澤か。君は手を負つたか。

水　イゝヤ、ナアニ。

比　ヱ、隠すな〳〵何だこれしきに。

ト春田しげを見て。

春　ヲヤ〳〵あなたは此間の婦人だネ。

ヲ、あなたは比良田様。よい所でお目にかゝり升た。先達より御信切有難う ムり升。御蔭げ様にて。

トいひかけ、愁ひのこなし。

比　父母にも逢ひましたか。

春　ハイ、得逢ひませんでムり升た。

比　ナニ、逢はなかつた。

水　それは今、僕も聞た。又支那兵にやられたそうだ。

比　ナニ、支那兵の狼藉に。ヱゝ忌々しいナア。

水　然し斯く同胞が他郷に在つて、父兄に別るかなしみ

も、皆頑迷の支那人奴。

春　思へば口惜しうムり升る。

比　ヲヽ、斯ういふ内も又敵役がおそうも知れぬ。早く営まで行ふじやないか。

水　ヲヽ、左様仕よふ。

ト云ひ乍ら立上ろうとして、疵にてヒヨロ〳〵とする。

比　ヱヽ、何だ其ザマア。

水　ナアニ、大丈夫だアナ。

ト両人思入在つて下手へ入る。跡炮声烈しくなり、日清軍入乱れ戦争の立廻りいろ〳〵在りて、比良田、又々大勢の中へ入り交り来る。皆々支那兵は新聞記者を捕らへよ〳〵といひ乍ら切つてかゝるを、比良田いろ〳〵立廻る内、比良田尋常に搏に付け、モーダメダゾといふ。これにて比良田気を奪われぬハヅミ、大勢折重つて縄をかける。此模様宜敷幕。

四幕目

日清戦争

第四　北京城内軍獄の場

出場人名

新聞記者　比良田鉄哉

同　水澤恭二

支那獄吏　袁酷烈

同　袁同臭

牢番劉昌和

後ニ日本人秋山桂蔵

〃　妻女揚巴

獄丁　弐人

北京城内軍獄の場

本舞台平、上手の方、奥へ引込まして板屋根、仮建の牢屋。この前、板戸締め有り。平舞台向ふ城壁の書割。この向ふに樹木の遠見を見せ、総て北京城内軍獄仮小屋の体。下

手前の方に同じく仮建の番小屋。茲に支那獄吏袁同臭官服、この下に牢番劉昌和実は日本人秋山桂蔵、同朴揚甘控へ居ル。時の鉦にて幕明く。

同　コリヤ〳〵牢番共。兼て申付て置た通り、当仮獄に囚われて居ル囚人は、通常の犯罪者とは違ひ、今我大清国の敵国たる日本人のみならず、軍の秘密ヲ通信する憎き奴故、直ちに命を取るべきも、敵の模様を白状さすため、食を減じ水ヲ断ち、仮令背を割り鉛を賤(ママ)でも吐さにやならぬ奴なれば、大切に守護するは勿論、少しも情を掛けざる様、随分困苦ヲ受けさせい。

朴　ヘイ〳〵かしこまり升て厶り升。それは最う大切な罪人と存じ升て、私なぞも夜の眼も寝らず看護して居升而已か、今日で五日の間絶食させて居り升る。

昌　然しこれでは罪人も余程の労れと見え升て、今日抔は其内一人は最早立居る事も出来ぬ様子。殊に足に受けたる疵にて、非常によわつて居り升から、万の手当をいたさずは、肝心事実を御調べに如何かと存じ升。

同　ヱヽダマレ下郎奴。たとへ如何程労れても、この罪人に用捨が成ろうか。汝、左様な事を申て囚人にかまいだてする時は、返つて貴様のためにならぬぞ。

朴　それ〳〵見ろ、貴様はいつもそんな事をいつて困るではないか。

昌　ハイ、おそれ入ましたが、デも余りな。

同　何だ。

朴　コレ〳〵。

ト止める。昌和思入れにてわびる。

同　以後は急度謹しまうぞ。今に上役がおみまわりになるから、充分気お付けねばならぬぞ。

朴　ドレ〳〵私も次の仮獄お見廻りませう。

ト捨ぜりふにて袁、朴下手へ入る。跡、昌和思入れ在つて。

昌　アヽ情ない事だナア。如何に罪人の身なりとて、火付け盗賊でも在ろう事か、国と国との争ひで間者と成つた云わば侍ひ。仮令敵でも大切に取扱ふが通であるに、食も与へず身動きも出来ぬ苛酷の扱い。野蛮と云ふか、残酷と云ふか。これが他国の者で在るか。切つても切れぬ同胞の。

トいひ乍ら四方へ思入れ。
幸ひ今日は茲の牢番に雇れたるが幸ひと、自分の弁当掛(ママ)らしては、毎日入る握めしこれも己れの罪亡し。どりや、今の間に入れて上げよふ。
ト弁当にて握りめしお拵らへ、仮牢の中へ入れよふとする。此の以前より小屋の蔭に昌和の妻揚巴、支那婦人のこしらへにて出来り。
和　申、その御飯、どこへ持つておいでなさいます。
昌　ムヽ、ヲヽ、驚りした。女房か。ナニ、これはその……何だ。
和　イヱ、そのしなだれにおやりなさいますか。
昌　イヱナニ、コレハ今何だ、此頃の暑さで弁当が腐つたから、今犬に遣ろうとおもふて。
和　いゝゑ、犬ではござい升まい。そりや仮牢の。
　トいふを昌和驚りして止め。
昌　これ〳〵何をいふ。馬鹿な女め。
和　いゑ〳〵申さずには居られません。これが只の者ではなし、今戦国の日本人。まして大事の罪人をどふいふ訳か庇ひ立して、若し上役に見咎られたら、あなたを初め妻子眷属逆ばりつけの重い御仕置。
昌　ムヽ。
和　サア、あなたはどんな義理が在るとも、何も知らぬ。私迄おそろしい眼に逢はねばならぬ。それ迄御心づきませぬか。第一おかみへすまぬ訳。どいふ訳であなたはマア、日本に義理がムり升へ。それ聞かして下さいまし。
　トこれには昌和当惑のこなし。
昌　イヱナニ、馬鹿な事。ナアニ、日本に何の義理がある者か。
和　そんならなんでその御飯を。
昌　ムヽコレハサア、余り御上が御無理だから。
和　又そんな事を。ナンデ御上が御無理だから。
昌　サア、敵軍の間者として白状をさすべき事の有る大事の咎人。若し食物を絶つた上、この獄中で死んだ時は大事の敵の謀を聞く事が出来ぬではないか。
和　サア。
昌　それに何ぞや食物を与へぬ抔とは、昔より賢人君子の多い我国。その賢国にも似合ぬ御仕置き。それで己れは我国への忠義をおもふて、罪人をかばふたが、

何の不思議だ。

和　成程、それはそふでも在ろが、それは御上へ通らぬ訳。若し今にも御咎をお前、受けても申訳がそれで立つと思ひ升か。

昌　サア、それは。

和　申訳が立たぬ時は、なんぼお前が忠義でも、そりや何にもならぬ事。どふぞ思ひ止つて下さりませ。これ御願ひで厶り升る。

トこれにて昌和面倒なといふ思入れ。トヾ。

昌　ヱヽ、面倒ナ女の口出し。己れが心で己れがするのだ。勝手にしろ。

和　ヱヽ、そりやどふあつても、罪人を。

昌　ぐづ〳〵いふと離縁するぞ。

和　ナニ、私をそれ故に離縁するとへ。

昌　ヱヽ、面倒ナ。

ト昌和は泣キ入る妻を無理に下手の城門外へ押し出し、内より締りを仕て、実と思入れ。トヾ握めしを牢の内へ入る。これと同時に時太鼓を打込み、物音する。昌和驚りして下手へ来ると、上手より獄吏袁酷烈、前の同臭出来り。

酷　日本囚人両名に申渡す事在るに付、引出せ。

昌　かしこまりました。

トこれにて仮牢の前の戸を明ける。茲に前幕の新聞記者比良田鉄哉、水澤恭二、色青ざめ、疲労したる拵らへにて手足を鎖に連がれ住居ゐる。

酷　彼等日本人等は、大胆にも我清国の都に入込み、戦略の秘密を探らんと企つると雖も、智謀に富みたる我国の将帥、何条汝等の為めに謀らるゝ事在らん。却つて斯く囚となり、死恥を晒さんより、少しも早く間諜なりと白状して、我軍門に降を乞へ。其時には汝等の為め死罪の程は許されん様取計ひ遣すべし。心を定めて返答せよ。

トこれにて両人は惜しき思入れ。

比　だまれ豚尾。われの卑屈に引比らべて、降を乞へとは無礼な言葉。殊に我々両人は汝等の浅薄なる軍略などを探るべき暇はないぞ。万国中立の性質を有つ新聞記者として、社会の耳目となるべき大責任を担ひ、天下に雄飛する者たるを知らんか。

水　如何に野蛮盲昧の国とは云へ、是非の弁別も無く、無関係なる吾人を捕らへ、不法にも暴逆にも、盗児お扱ふに増りたる斯く残酷なる獄に投じ、余つさへ食を絶ち、手足を縛し、益々日本男子の恥辱となる事。それ故大に決心を望むのだ。

比　これは又君にも似合ないじやないか。李鴻章の面前へ引立されるは、僕は尤も望む所だ。若しそんな事在らば、我輩は充分彼れに論じてやる。今来た様子、盲昧中の盲昧官吏に何を云つても仕様がない。兎にも角にも清国中第一位の李鴻章が、少しは物の道理も別ろう。彼れに一応論じた上、若し彼れ悟つた所が在れば、返つて彼れが幸胸(マヽ)だ。其上ともに不法の所置を仕向けた時には、又他の手段さ。

水　イヤ〳〵それは詮ない事だ。今更幾許理非を解いても、それを顧る位なら、こんな残忍な扱ひも仕舞ひ。それより君も筈杖にかゝり、若し命でも落す時は、未だ此の上の恥辱だぞ。いさぎよく死を決せい。

比　死を決するはいつでも決しる。いくら彼等が筈杖に逢つても、高の知れた支那流の拷問。何程の事が在る者か。気の弱い事をいふな。

水　ナアニ、いくら筈杖を受けたつて、それに恐れる僕でもないが、何分此間から疲労といひ、七日余りの絶食と疵の余痛と一時に重り、僕は到底旦夕に命がせまつて居るとおもふ。

比　ヱヽ馬鹿いふな。水澤、貴様も日本男子じやないか。こんな所で死ねると思ふか。

水　ナアニ死ぬるもか、こんな汚らしい獄中で、日本男子は死卑劣手段を以て神州男子を殺さんとする残悪は、今に汝が身に報ふぞ。指をかなへて待つて居ろ。

酷　ヱヽ、云はして置けば聞くに耐へざる其雑言。益々許せぬ大悪人奴。此上尚も強情張らば、李将軍の御前に引き、筈杖を当てゝも降伏させるぞ。

比　ヱヽ汚らはしい降伏呼ばわり。汝等に云ふ言葉はないは。どうとも勝手にするがいゝハ。

水　それとも命が欲いなら、美事汝に呉れてやるは。サア、尋常に取ろうて見せよ。

酷　ヱヽあくまでさかろふ敵の離言過言奴め。

ト立上る。両人ハツトにらむ。これにて酷烈おそろしき思入にて、ダジ〳〵となり。

いづれ李公の面前で手酷き拷問受けて見よ。牢番、

囚人に気をつけよ。

ト云ひ乍ら内々恐しき思入れにて下手へ入る。跡、昌和も思入れ在つて下手へ忍ぶ。跡時の鐘を打ち込み、凄味合方になり、比、水両人顔見合せ、ジツトコナシ。水澤、疵の痛むと病方にて苦しむ。

比　水澤、どうした〳〵。

水　ム、モウいかんぞ。君も決心しろ。

比　ナニ、改まつて決心しろとは。

水　サア、今も獄吏の言つた通り、いづれ吾々は取らるゝ命だ。殊に今の模様では、いつかは李鴻章の面前へ引出して恥辱を与へた其上に、命を取るの覚悟と見えるが、若し其様な事でも苦には仕ないが……。残念乍ら虚弱な体だア。万一僕が瞑目したら、比良田、肉体の忠節は二人前遺つてくれ。

トこれにて比良田はたまり兼ね、ホロリト思入れ。

比　ヲ、よくいつた。比良田鉄哉は同胞中の同胞だぞ。

水　ム、。

ト水澤、嬉しき思入れ。この中、水澤段々疲労加り、苦し思入れ。段々に落入ふとする。

比良田は介抱する。

比　ヲイ〳〵水澤〳〵。しかりせんか〳〵。どふした〳〵。ヱ、気弱い男だナア。貴様はそんな事で大事が遂げられるか。

トいつても水澤は苦しみ、答へず。比良田は大声にて。

ヲイ水澤、今死んでは今日までの苦心は水の泡だぞ。吾々が忠を貫く迄は、断然死ぬ事はならんぞ。

トこれにて水澤は眼を開き。

水　ナニ、ナアニ、死ぬものか。日本臣民の水澤恭二が、仮令肉体は土に帰しても、精神は護国の鬼トなるぞ。

ト云ひ乍ら比良田と手を取り交し乍ら、段々〳〵に落入る。これにて比良田は不便のこなしに、忍泣きになく。此時、又々下手より以前の獄吏袁同臭来り。

同　牢番〳〵日本囚人比良田、水澤、大将軍の洲へ引け。

トこれにて前の昌和出来り、ハツト比良田の前へ来り、思入在つて。

昌　立てイ。

トいつても比良田は愁に沈んで居ル。同臭はいらつて。

同　ヱヽ何を仕て居るか。

ト昌和は水澤を見て不思議のこなし。そつと比良田の袖を引く。比良田は心付き。

比　ナアニ、それには。

ト立上るを木頭。昌和は水澤を見て驚く。比良田はキツトなる。袁同臭は薄気味悪き思入。双方引張にて幕。

五幕目

日清戦争

第五　李鴻章面前痛論の場

出場人名

李将軍鴻章

副官　趙武慣

〃　洪炳集

獄吏　袁酷烈

〃　袁同臭

下官　四名

新聞記者　比良田鉄哉

春田しげ子

李鴻章面前痛論の場

本舞台引込まして高足弐重、正面唐模様の瓦燈口、錦の帳を垂れ、此の前に錦を掛けたる卓様の者三つ在り。平舞台は敷石様にて所々唐様にしかけあり。総て北京城内清

庁の道具。茲に正面左右に清官趙武慣、洪炳集などいへる支那官控へ、平舞台左右に支那国官吏居並び、唐楽様の静なる合方にて幕明く。

武　如何に袁酷烈、今日は兼て其許より申達ありたる日本新聞記者と名乗る比良田鉄哉、水澤恭二の両人を将軍身から取調らぶる旨に付、得と御取計ひある様う申おく。

炳　殊に今日は我が大清国と日本との干係は益々相背反し、時直に由らば彼より我れを略奪せんとなし、既に交戦の最中。少しも油断ならざる折柄、彼の新聞記者と呼ぶ奴は、我内地の探偵に来りし者のよし。容易ならざるものなれば、将軍にも深く御用意の上、今日直々の取調べあれば、方々にも其旨相心得られよ。

酷　就而は申上升るは、彼の記者と申す者、御錠によりて先日より食を絶ちて困めしに、中〳〵驚く様子もなければ、遂には奴等も身体おとろへ、とう〳〵水澤恭二と申する者は、先刻死忘いたしました。されど、比良田と申奴は、まだ〳〵血気おとろへず、只今引かれ参り升けれど、名に負ふ日本の勇士と云へど、糧食なくては及ばぬ事。余程心神(身)をとろへおれば、御心配にも及はせぬ。

武　シテ又其時捕へたる少女は、如何いたしたな。

酷　これも獄につなぎましたが、こ奴も中〳〵強情な者にて、日本人のつねとは申せ、降伏の様子も見へませぬ。

武　扨て〳〵女のくせに大胆な奴。よし、これより一々呼び出し我将軍の直裁にまかせん。

ト此時、時計の音と共に楽様の鳴物になり、正面の鈍張を上げ、李将軍、唐装好みのこしらへにて出来り、正面にすまふ。皆々立礼する。

李　兼て達しおいた日本記者、引出せ。

下官　ハツ。

洪　御達により、日本記者引出させおきました。

ト此内下官二人立つて、下手に入り、直ぐに前幕の比良田鉄哉、春田しげ子を引出し来る。比良田、春田ともやつれたる好みの体にて、縄付の侭出来り、無念のこなしに

て平舞台に引き据へられ、李将軍はツクづく見て。

以下訂正冊尾ニ在リ

李―ヲヽ日本人比良田鉄哉、春田しげ子は汝か。今度は偶々隣国朝鮮との関係から、あなたの国日本と思わぬ戦をする事になつたが、云わば世の風潮の然らしむる所。決して故意のある処でないから、深々意に介せぬ様にせよ。見受る所、余程御程（ママ）労れた様じやが、どこやらに勇気凛然たるは、流石日本男子じやノウ。

トへつらゑる如く云ふ。比良田はムツトこなしにて、尚答えず。

どふじや、なぜ答へぬ。汝は日本軍隊のために我軍の秘密を探りに来たか。又、其他に深かき様子が在るか早やく白状した上で、降を乞へば、又予が許すべきもある事じやぞ。

比―イヤ、貴官がきゝおよんだ李将軍ですか。ハヽア、針が棒大の嘘言は支那の得意と承知するが、聖賢の道に聞へたる大陸国の孔孟の智学を備へしと聞し李将軍。百聞一見に若かずのたとへ。聞くと見るとは大いな相違。これでも友邦の大政事家か。ウハヽヽヽヽア。

ト大に笑ふ。皆々びつくりし、キツトなる。

趙武慣ムツトして。

武　将軍の面前に無礼の哄笑。

武・洪―控へおらう。

（半丁空白）

比　イヽヤ控へては居られない。今聞けば、日清の交戦は朝鮮の関係上、世の風潮のいたす所抔と、甘言以て我を誘ふは疾よりそれと悟つておるぞ。且つ万国公法の上中立の資格を供ふ吾々記者を捕らへ間諜などゝ見誤るは、皆下官共の臆病よりの邪推といふもの。それを深くも調べもせで、将軍みづから庁を開き、吾に対して降伏なぞと甘言以て誘ふとも、それにのるべきものと思ふか。イヤ、笑ふにたへたる浅墓さに、思わず抱腹いたしました。

李　汝左様理非お知らば、何故戦線外に居て取調べなせんぞ。新聞記者は仮令中立の性質たるものにもせ

よ、交戦中敵兵の衝突に逢へば、其誰彼れと尋ぬる隙なし。囚虜となるは戦中の習ひ。其上得と論じべし上、全く軍中に関係なき物は放ちやるべき場合もあり。然らば汝全く新聞記者たるの本務なそれにて申聞け。

比ヲヽ面白い。随分云つてきかして遣ふ。先づ第一に汝身ら広言する慈悲を旨とする聖賢抔と云ふに背きし条々あり。解て聞かさん、ヨク聞けよ。抑も新聞記者たるものは、汝の内外邦の東西を問わず、凡て現世に表らるゝ出来事を除かず網羅して、事実に依つて報道し、一ツ社会の進歩を計り、一ツは交際の便利を為すを基とし、其他国家を利するの点は、今更挙げて云ふを待たず。故に交際国にいたりては、仮令如何なる事ありとも、新聞記者の事業についても、故なく妨げを受くる事なく、中立の資格あるもの。且つ医師も又之れに同じといふ。斯程の事は学齢の児童も知らん。然るに汝が下官は吾々を捕へ、獄に投じ、盗児に等しき扱ひ為し、あまつさへ残酷にも非道にも、食事を絶つて身体をおとろへしむるに至つては、神より受けし人節(ヒト)を傷る大悪奴。これをしも聖賢の道といふか。これでも慈悲ある政事と云ふか。言語に絶えたる大悪奸奴。

（この間、削除あるか）

魂を以て一人汝が百千に当り、以てこの大業を遂げんに何の難き事在らん。最早愚言は聞に及ばず。不日、汝等を擒にて北京城内に対面せん。

李―ヒヽ益募る其暴言。最う此上は用捨はせぬ。各々彼れに笞杖を当テヨ。

ト是れにて下官弐人、袁酷烈立つて近寄る。

比良田キットナる。皆タヂ〳〵となる。又立つて、春田しげ子を打つ。これにてしげ子は婦人の事故、ウント気絶する。是れは

と比良田は尚々無念のこなし。

比―斯くまで云へど理非を知らざる獄卒共。ムヽ此上は片ツ端から怨みに倒れし我が同胞水澤恭二が仇お報じん。サア、仮令身体おとろへたりとも、神洲男子の生命を絶たれるものなら、絶つてみよ。

トこれにて皆々何をと、又立ちかゝろとす

る。此時、ドンチヤン打込み、炮声聞え、下手より前の袁同臭出来り。

南　急報いたし升。只今日軍、北京城の周囲を一時に取かこみました。早速開戦の御用意を備へよとの事でムり升。

武　然らば将軍、今日の調らべは之れまでとして、軍議の席へ。

李　ム、犯人は急度軍獄につなぎおけ。

トいひ乍ら李、趙、洪、奥へ入。跡、袁酷烈、恐る〳〵比良田の傍へ来り。

酷　立て。

（この間、脱落）

趙　の風潮とするか。

李　ダマレ小人。汝凡俗の身を以て、大陸国の高位高官に対し無礼の雑言。殊に政事国際の如何を批判す大胆者奴。斯る大事は汝等の容喙すべき事でない。控へて居ろう。

比　ヤア、小人とは汝が事。身高官にありながら、私意をさしはさみ、漫りに己れに逆ふ者を黙し、無辜を罪したる事、曽て聞き及べり。尚吾人と共に日本より渡航の商人なる此の女を捕へ、我と共に牢獄に投じ、苦しめたるは何事ぞ。斯る少女も間諜と疑ふの道理ありや。これ全く然らず、日本人を憎くむの奸ならず。心得の為め申し置かんが、この女の云れし如く、日本赤十字社々員は恐れ多くも我日本皇后陛下の御賛助を蒙る大慈善家にして、我日本のみならず、欧米各国に社交あれば、汝若しこの少女お傷るに至りては、我国而已か各国の責めは汝に帰すべし。これ如斯く大慈善家を苦しめたるに報ひなり。これ汝が不法の第三。まだ此上に返答ありや。以上訂正汝和奴、能くも我身の程も知らず、不礼の言を吐くものかな。吾が大陸国は中華と称し、東西に比類なき大国なり。然るに懦小の日本、能く何事をか為し得ん。之れ所謂、灯籠が斧の譬。だまりおろう。

比　ヤア、奇怪なる其言葉。兵驕る者は必ず破れ、他を悔るものは必ず亡ぶ。汝、大言を発つて自己の亡ぶを知らず。試みに思へ、我が日本が汝が外（マヽ）土十八省を席捲すると、汝が祖先愛親覚羅が満洲より出て、

春

大明を打破りたると、其難易果して如何。能く大業を創するに、何ぞ大小兵の多少お論ぜんや。其精神の向ふ所只一の日本。

亦私は日本赤十字社員で御厶り升。抑も赤十字社は、各国同盟の者で厶い升て、ヂユーネーブ条約を以て始メトし、即千八百六十三年、瑞西国ジユネブ府に於て戦時負傷者救護の法を設け、これらの物は皆局外者トして、互ひに保護すべきため、一定の章幕を付して之れを知しむる事とし、普仏澳を初め、遂に二十二国に及びました。それ故、我日本は博愛の気概よりして、明治十年西南戦争の時より、万国赤十字社に同盟したもので厶り升。それに此の清国は元よりそれ等の同盟もありませんから、仕方もありませんが、その慈悲者に対し、斯く残忍なる扱ひをするものは、如何にも非道ないたし方です。

比

又第二には日清の争ひは只通常の往違ひとは葉(ママ)さかして逃るゝ共年頃日頃汝が国は慾を東洋に逞ふし、隣国たる朝鮮ヲ我物顔に左右なし、小国と悔り隙あらば我れに属せん其奸謀は顕然たり。然ルを今度朝鮮にたいする汝が干渉の甚しきより、みるに忍びず隣国の好誼上、義に由つて朝鮮が独立を保護せんため、内政を華(革)めしむるを、汝が自由に妨し事を愁れひ、不法にも我に対し敵意を示せしに、因るに非ざるか。元来、我日本は挑戦を略取するが如き野心なきは、先づ汝眼を開て宇内の形勢を見よ。今東洋に於ける清国の恥辱は則チ我日本の恥辱なり。東洋先進の吾が文明を以て、朝鮮の独立を保護し、汝清国の蒙昧を覚さしむる公義心なりとは知らず、頑固にも老閑の残夢を貪り、東洋の文明を拡張せんとする大趣意を誤り、盛字軍とか毅字軍とか称し、土方半分の未熟練なる兵を□ク襤褸船に乗せ、以て吾が隣国救護の事業を妨げんとするが頑愚、笑ふに絶ゑたり。依て是非なく事茲に及び、吾が神洲の太兵を仮り、一刀両断以てこの妖雲を掃せんとするなり。斯くても汝に悪意なきと云ふか。斯くても社会

（この間、脱落）

ト云ふ。比良田はウント立上るトタン繋ぎのくさり切れる。これにて袁、同両人、び

つくり後ろに倒るを木頭。ドンチヤン炮声烈しきなりものにて幕。

大詰

日清戦争
大詰　北京城（三字削）日軍大進撃場

出場人名

少将　植嶋巌
中佐　脇田亮
比良田鉄哉
劉昌和
　実ハ秋山桂蔵
軍曹　加藤善明
清将　趙武慣
春田しげ子
妻楊巴
日軍大ぜゐ
清軍大ぜゐ

北京城**日軍大進撃の場**

本舞台向ふ支那様の城壁。下手に櫓様の窓

有り。上手に樹林の繁りたる道具総て要害なる城の体。炮声烈敷、上手の林を楯に日軍大ぜゐ炮撃を仕て居る。これを前幕よりの植嶋少将、脇田中佐、指揮を為して幕明く。炮撃一順有る内、城壁の上へ支那兵顕はれるより、日軍尚々急ぎ撃ちの号令を掛け、攻撃する。此時、城の内より暫く御待ち下さいと声して、下手の城窓より前の牢番劉昌和実ハ日本人秋山桂蔵、春田しげ子を助け出来る。これにて脇田中佐は撃ち方止めの号令と共に炮撃を止む。秋山はこれにてしげ子を窓より城外へおろし、自分も将官の前へ来り。

秋　ハイ、暫く御待ち下さい。私は日本人でムり升。

脇　ナニ、日本人だ。そふして何者で在る。

秋　私がこの様に唐話を語つて居り升故、御疑は御尤でムり升るが、私は今より二十年斗り以前より、様子有つてこの清国へ流れ渡つて参り升た者でムり升て、素とは大日本の相洲小田原生れ。親共は其後病死致し、其侭帰朝の道もなく、日雇を業と致して居り升たが、今度の戦で城内へ雇はれ、軍獄の番人を致して居り升内、かの日清の事件が起り升て、先日よりアノ新聞記者の比良田様に水澤様とやら申我国人の囚虜となつて御出なされ、実に非道の扱を見るに付けても、流石にも生れた国の性根は腐らず、口惜しくつてなりませんから、どふかこれをば御助け申、それを日本への御詫びとして、帰朝が仕度いと存じ升て、それ故斯うして参り升た。

脇　ムゝそれにて様子は分明した。そふしてそちらの婦人は誰れだ。

　　トこれにてしげ子は疲労したるこなしにて。

春　ハイ、妾は春田しげと申し升る者。

　　トいひ乍ら脇田中佐を見て。

脇　ヲゝ貴官はいつぞや黄河の陣営で御眼にかゝり升た。

春　ムゝ成程、黄河の旅団で保護を与へた婦人だな。

　　ハイ、其者でムり升。その御蔭様で命を保ち、この北京へ参り升て、是より又々捕らへられ、只今漸く秋山様に茲迄送れて下さり升て。

植　ムゝ左様して、今話しの囚虜となりたる新聞記者比

良田、水澤と申者はどふした。

秋　ハイ、其比良田様は数日食料迄も断つて、苛酷な責めに御逢ひでムり升たが、今日の大進撃で城内の騒ぎに紛ぎれ、只今にも並んで御出の手筈でで(ママ)ムり升る。

脇　そふして水澤と申し者は。

秋　ハイ、其水澤様は可愛そふに、兼て捕縛の時に足に受けた疵が治療な届かず、其上日々の責め苦に耐へえず、とふ〳〵恨らみを呑んで御落命でムり升た。

脇　ナニ、壱人は死んだか。ムヽ。

植　シテ、其方の名前は。

秋　ハイ、牢番の時は仮りに劉昌和と申升たが、実は秋山桂蔵と申者。

脇　紛ふ方なき日本人だな。よし〳〵それでは茲は開戦の最中。少しも早くその婦人を保護して仮営迄行け〳〵。

ト此内又々炮声聞こへ、城壁の上より前の比良田鉄哉出来り、直ぐに飛び下り。

比　ヲヽ、我軍の指揮官へ申升。茲は場内に地雷火がムり升。御報告致し升。

ト此内、春田、秋山これを見て。

春　ヲヽ、あなたは比良田様。

秋　よく御出で遊し升た。

比　ムヽ、両人とも無事でしたか。

脇　汝は比良田か。ヲヽ、危険だ。退け〳〵。

ト云ひて軍隊に向ひ、進めの号令をかける。これにて兵士は皆々整列正しく、向ふの方へ進撃して入る。植嶋少将、脇田中佐もこの隊に付て入る。比良田も続いて入る。跡、秋山は春田を助け入らふとする処へ、前幕の妻楊巴馳せ来り。

昌　アレ申、暫くは待て下さりませ。斯様の事とも存じませず、あなたを御恨み申升たが、只今様子を知りまして、初めて貴方が日本の御方と分る上からは、仮令私は清国人でも、仮りにも夫婦となつた中。どふぞどこ迄も御連れなされて下さりませ。

秋　ムヽ、其方は女房か。ヱヽ、今は中〳〵戦中にて委しい話も出来ぬ〳〵。万事は鎮定した上で。

昌　ヱヽ、ジヤと申して此侭に御別れ申ば、又いつ逢ふとも知れぬ故。

秋　ヱ、それ処では無いワイ。

ト昌和〈楊巴「弐字訂整」〉を突きのけ、しげ子を背負ひ一さんに向ふへ入る。跡、楊巴はワツト泣き伏す。此模様宜敷、この道具同じく城内と変る。

ト日清の兵士入乱れ、戦ひの立廻りいろ〳〵在り、トヾ清国の将官趙武慣、日軍の軍曹加藤喜明との仕合ひ。日本軍人足、広目屋の手代、運輸の手伝ひ等のこなしいろ〳〵在り、この内日軍隊、植嶋少将、脇田中佐、兵士等を率ひて進撃して来り、舞台に並ぶを切つかけ、炮声烈しく、宜き時分見得にて幕。直ぐに再び引き明け、出場の俳優皆々居並び、

日軍万歳

と三唱し、軍楽を奏して局を結ぶ。

（以下、添付の罫紙に記載）

大詰　北京間道斥候の場

本舞台、堤に沿ひたる川の道具。此向ふ森林。総て北京に至る間道の有様。茲に清軍の将官趙武慣、袁酷烈、兵士大勢を率ひ立並び。

趙　近来は日軍の斥候、此辺に来り、俱ふ様子故、皆々注意するが宜い。

袁　イヤ〳〵此頃は此辺に、深更に及ぶと青い火の見ゆる由、これは全く困乱を示す怪事と見え升。

趙　ナニ、それこそは日軍の斥候に電気燈を照らして本隊に通ずる者あれば、皆々油断するな。

兵士　かしこまり升た。

ト皆々入る。跡、日軍斥候香川肇、窺ひ出で、清兵と立廻り、トヾ袁酷烈の為めに川へ落る所へ日軍大ぜゐ進撃し来り、堤に寄り連発して、終に川を渡り向ふへ入る。跡、再び香川、手負ひにて出来り、清将袁酷烈と戦ひ、これを切伏せる所にて幕。

作者　藤沢浅二郎

訂正・削除

日清戦争脚本之内訂正削除

序幕黄河口軍営の場の内

（此前脚本の通り）

兵一　然し一昨日の野戦に敵の地雷火を発見したのは、全く我輩の功で有るが、アノ導火線に火を差して、返つて彼れの利益を用ひて味方の勝利を得たのは愉快で在つた。

兵二　アノ時導火線を発見したのは、指揮官の命を受けて我輩が探偵したのだ。決して君の功じやない。指揮官の観察に依るのだ。

兵　イヤ、決してそふじやない。全く僕が発見したのだ。

兵三　ヲイ〳〵そんな議論を仕て居て、指揮官の耳に入つてはならぬ。

ト此内山内中尉出来り、皆々をたしなめる。

（此間脚本の通り）

茲の跡、脇田中佐、兵卒壱人連れ出来り、植嶋少将に面会す。

脇　兼て御命令がありました黄河口より大沽に至る海道の本地にといふ者が植付けて在りまして、一ト方ならぬ障碍で厶り升。

植　フム、ソノ高粱といふものは此地に産れる岡穂の様なものか。

脇　其高粱といふものは、高サ弐間余も在りまして、青々と繁茂して、其上実を結びまして、目下は花も繁茂して、仮令火を以ても焼尽す事も出来ず、誠に困却致し升た。

植　そふして未だ進軍の令は来ませんか。

脇　我海軍もあれ丈けの備を仕て居り升から、我兵も海南府に道を取り、大沽を突て白河に迫り、天津より北京城に至り度き覚悟です。

植　如何にも此地に□□滞留するも、徒らに敵の兵備を待つといふ様な事に至つては、急ぎ面白からぬ事なり。且つ子□は土囲といひ決して軽率粗暴の行ひ無き様、部下へ注意して下さい。

脇　承知致し升た。

植　然し哀れに朝鮮の役、牙山、成観駅を手も無く打ち破れば、我□軍則ち王師の向ふ所敵なしだ。

脇　如何にも愉快の□一々□ひす。何でも早く平げて、我国民を安眠に就らしたい者です。

ト此台詞終りて脇田は下手へ入る。

（此間脚本の通り）

上田伏佐子は春田しげ子に日本赤十字社の章を渡し。

上　これを持つて戦地を歩行く時は、赤十字社々員の資格を以て保護を与へて上げますから。

春　ハイ、有難う厶り升。どうぞ左様に御願ひ申上升る。

（以下、脚本の通り）

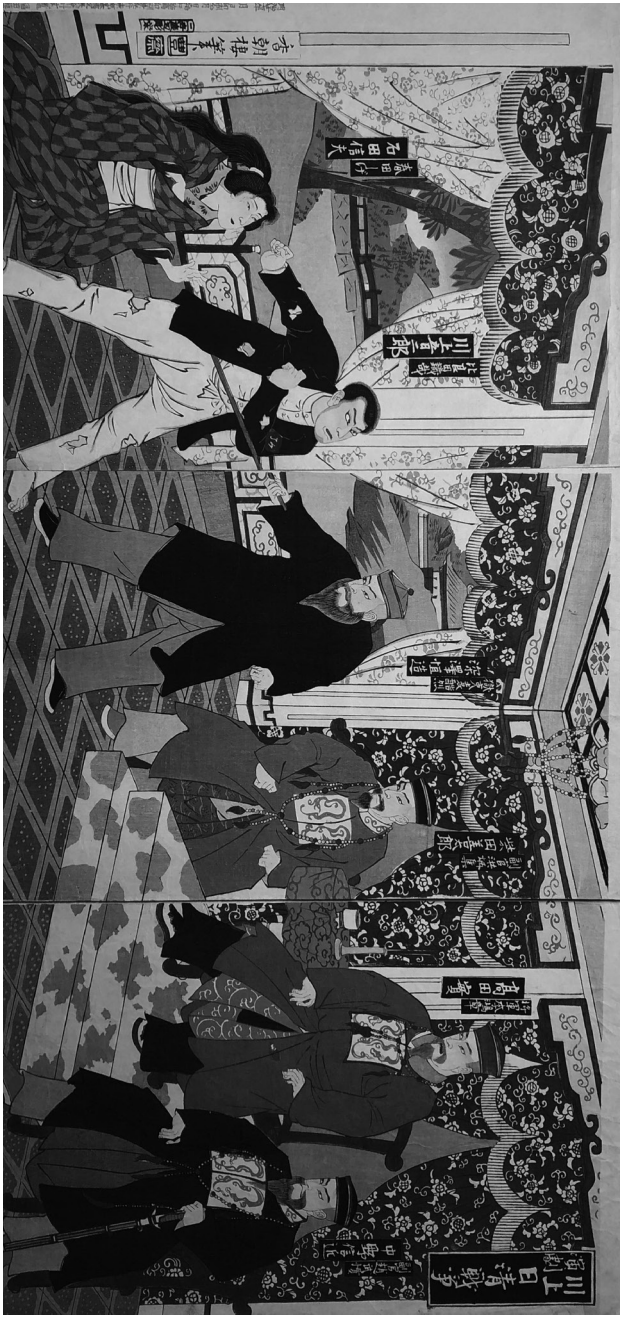
同弐幕目返し関門内原野の場の内

日兵加藤清太郎、小西行蔵が酒を呑む体を除く。

（此間脚本の通り）

後ち植嶋少将、脇田中佐、支那兵大勢を追ひ来り、皆々を追ひ返して後、支那壱人植嶋少将を炮撃せんとすると、脇田中佐これを認めて、支那兵を切り伏せる。植嶋少将は支那の旗卒壱人を捕らへる。此見得宜敷幕。

作者　藤沢浅二郎



香蝶楼豊斎「川上演劇 日清戦争」明治 27 年（1894）

解説

解説

本書に収めた四作品は、いずれも明治期に上演された、戦争の場面を持つ演劇である。台本が現存せず、草双紙の影印・翻刻を収録した『明治年間東日記』は、慶応四年五月十五日（一八六八年七月四日）に幕府側の彰義隊と薩長を中心とする新政府軍とが戦った上野戦争を序幕に配し、そこに関わった人々の「戦後」を描いている。『日本大勝利』と『会津産明治組重』は歌舞伎、『壮絶快絶日清戦争』（「壮絶／快絶」の角書きは上演時の番付による）は新演劇の川上音二郎一座によって、日清戦争の最中に上演された。

明治期には、これらの作品だけでなく、西南戦争、日露戦争の際にも戦争を題材とした演劇が上演され、西南戦争に先立つ各地の不平士族による反乱や、明治十五年（一八八二）に朝鮮の京城（現・ソウル）で起きた反乱事件である壬午事変[1]、三十三年（一九〇三）の義和団の乱（北清事変）などが演劇で取り上げられた。歌舞伎が明治後期以降、伝統演劇としての色を濃くしつつも、太平洋戦争期に至るまで戦争劇を少なからず上演し続けたことについては、ジェームズ・ブランドンによる詳細な研究がある[2]。しかし、演劇としての完成以来、戦乱のない時代を過ごした歌舞伎が、戊辰戦争という未曾有の事態を経験してから、西南戦争を経て、後発の新演劇（新派劇）との本格的な競合という局面を迎える日清戦争時までの三十年弱の期間は、映像というメディアがいまだ登場しておらず、歌舞伎を始めとする演劇が速報性を持ったメディアとして認識されていたということもあり、やや不謹慎な表現かもしれないが、まさに「戦争劇の黄金時代」であった。

しかしながら、というよりも、こうした速報性や戦争という題材の時局性からして当然というべきか、これら戦争劇には台本が残らないものも多く、その内容や演出等についても、近年まで本格的に研究されることは少なかった。明治期の歌舞伎における戦争劇の研究に先鞭をつけた一人である神山彰の言葉を借りれば、「「戦争劇」という演目群こそは、全く忘れられた明治期のジャンルである」[3]。

とはいえ、明治期の戦争劇でも、これまでに翻刻紹介されている作品も存在する。たとえば、この時期のもっ

とも重要な狂言作者である河竹黙阿弥（二代目新七）の作品では、大正末期から昭和初年にかけて刊行された全集に、上野戦争を当て込んだ『狭間軍紀成海録』（明治三年〈一八七〇〉八月、守田座）が収められており、台本が現存せず全集未収録の西南戦争劇『西南雲晴朝東風』（明治十一年〈一八七八〉二月、新富座）も、近年になって埋忠美沙による詳細な解題を付した正本写草双紙の翻刻が出版されている（正本写草双紙については、『明治年間東日記』解説で触れる）[4]。また、昭和初期に歌舞伎篇五十冊が刊行された『日本戯曲全集』の第三十二巻『河竹新七及竹柴其水集』（春陽堂、一九二九年）には、黙阿弥の高弟・竹柴其水の上野戦争劇『皐月晴上野朝風』（明治二十三年〈一八九〇〉五月、新富座）および、本書で全幕を翻刻した『会津産明治組重』のうち、本書収録の台本では六幕目・七幕目にあたる二幕が収められている。

『日本戯曲全集』が『会津産明治組重』全七幕のうち二幕のみを収録した事情について、同書の解説で河竹繁俊は次のように記している。

二十七、八年の日清戦役を当て込んだものとはいひながら作者が実地の見聞を土台にした写実劇で、初演以来舞台には殆ど出ないものであるが、其水篇には是非収めるやうにと、当時の舞台を知つてゐる先輩の注意によつて、特にこの二幕だけを採つたのである。[5]

この「先輩」が誰であるかは不明だが、この解説が執筆された時点では、其水が没して六年しか経っておらず、坪内逍遥の仲介で黙阿弥の娘・糸の養子として河竹家に入った繁俊にとって、其水が良き導き手であったことを思えば、其水自身がこの作品に自信を持っており、生前それを繁俊に語っていたことも想像できる。劇作家・岡本綺堂も、「その当時、幾十種類に上る日清戦争劇を淘汰して、そこに残る物があるとすれば、恐らく此の一幕であらうと思ふ」[6]と、六幕目「入船町貸長家の場」を高く評価している。

たしかに、この場面は、日清戦争の勃発によって日本人の妻と子と別れて帰国を余儀なくされる清国人・道昌恵（「どうしようけえ」のもじりである）を主人公として、これを座頭の初代市川左団次が演じた点に特色がある。ま

た、困窮する道昌恵一家に同情して芋を持ってきてくれた近所の女たちや、道昌恵の妻となったおぎんに「親切心」から同情しつつ、清国人への差別感情をあからさまに見せる勝五郎が去ったのち、おぎんは、なぜ自分がこのように「穢多か非人なんぞのやうに」人々から見下げられねばならないのか、と嘆く（本書二八七～九頁）。ここでのおぎんは、かつての被差別階級の人々に対する自分の差別感情を意識することはないが、帰宅した夫と話すうち、

女　身の不仕合に路頭に迷ひ、どふ仕やうかと思ふた所、大家さまの御深切で子迄まふけし中なれば、今度の軍サに是非なくも、どふでも別れねばならぬとは ○

〈李鴻章とは名に聞ケど、たらぬ智恵より戦ふて恥辱を取るも知らずして。

軍サをせねばよかろふに、斯ふいふ歎きをさするのも、身の程知らぬ南京の ○

トいゝかけ心付キ、思入有て。

サ、おまへの前では言にくいが、私共の思ひでも、軍サに勝はせぬわいナ。

（二九〇頁）

と、清国人である夫の前で、「南京」という蔑称を口にして、思わず口をつぐむ。この時期の歌舞伎で、同情や親切心のなかに潜む相手を見下す感情や、差別の被害者が自分の中にもある差別感情を意識する瞬間を描いた点も、評価することができるだろう。

もっとも、どれだけ「人間を描けているか」といった観点のみでは、これらの戦争劇を十分に理解することはできない。神山は同時代のパノラマ館などとの共通性を指摘しつつ、火薬等を用いた戦闘場面など、戦争劇が持つ視覚的側面の重要性を論じている[7]。こうした「見世物的」ともいえるスペクタクルの要素は、演劇史的には一時的な流行として捉えられがちであるが、当時の観客にとっては見過ごすことのできない「魅力」であった。しかも、戦争劇の視覚的演出は、やはり明治期にしばしば上演され、今日ではほぼ忘れられた自然災害や海難事故を描いた芝居における演出との間に共通性を持っている[8]。さらに、そこで用いられた演出上の技術は、例え

ば黙阿弥の最初の引退披露の演目であり、戦後まで上演が続く『島鵠月白浪』（明治十四年〈一八八一〉十一月、新富座）で主人公の乗った船が波に呑まれる場面などにも応用されている。戦争劇の視覚的側面は、決して演劇史の「主流」と隔絶したところに局地的に存在したわけではない。

その『島鵠月白浪』では、明治歌舞伎の三名優、九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎、そして左団次の三人が顔を合わせる。近代歌舞伎を確立した存在としてほとんど崇拝の対象とすらなった彼らについて語る際に、まず話題となるのは古典演目であろう。しかし、左団次の演じた清国人・道昌恵が当時の観客に感銘を与え、昭和始めまでは語り草となっていたのはすでに見た通りであり、左団次は生前最後の舞台でも元寇（文永の役）に仮託して日露戦争を描いた松居松葉『敵国降伏』に主演している。[9] 団十郎も先述の西南戦争劇『西南雲晴朝東風』で演じた西郷隆盛（劇中では西條高盛）の号・南洲にちなんで団洲と呼ばれるようになったし、[10] 菊五郎は其水の上野戦争劇『皐月晴上野朝風』で彰義隊の天野八郎を演じたが、実名こそ出さないものの、これ以前の『狭間軍紀成海録』『明治年間東日記』でも天野を思わせる役を演じている。菊五郎の当り役を集めた揃物の錦絵『梅幸百種』（豊原国周画、明治二十六～七年〈一八九三～四〉）にも入っているように、「天野八郎」役は菊五郎の隠れた当り芸であった。明治歌舞伎を代表する団菊左の経歴のなかでも、戦争劇は重要な位置を占めている。

このように記せば、際物として見過ごされがちな戦争劇が、同時代の観客の感覚に訴え、また演劇史の上で重要とみなされる作品や役者にも影響を与えたものであることは理解されるであろう。しかし、戦争劇の「面白さ」は、けっして視覚的な要素だけではない。

本書に収めた各作品の詳しい内容や注目すべき点については、それぞれの解説に譲るが、『会津産明治組重』の場合、『日本戯曲全集』に収められる幕だけを見ると、道昌恵は妻子との悲痛な別れを強いられる悲劇の主人公である。しかし、本書所収台本を読むと、彼が口のきけない順礼を装って測量を行っているところを捕縛されるという場面（七幕目「相模教心寺山の場」）がこれに続くことに驚く。大時代なのだか現実的（後述するように、当時実際に国内で不審な清国人が逮捕される事件があった）なのだかわからず、妻子との別れの愁嘆場の余韻も台無しとな

るこの場面は、実際の上演では捕縛されるのは別の清国人となり、左団次ではなく市川八百蔵（七代目中車）が演じたらしい。だが、それでも大詰の「新橋ステーションの場」で、西瓜を清国人の首に見立てて竹槍で突くなどという幕切れを見れば、この作品が清国人に対して同情的な視点でのみ描かれているとも、そこに差別感情が存在しないなどとも、到底言うことはできない。

黙阿弥『明治年間東日記』の場合は、明治初期のさまざまな社会的出来事を巧みに各幕に盛り込みながら、上野戦争の敗者たちや、いわゆる身分解放令（明治四年〈一八七一〉八月）以前に「非人」とされ差別を受けていた者、家の困窮から遊女とならねばならなかった女性などの姿を描き出す。しかし、後述するように、そこで描かれるのは、あくまでも極度に理想化された「新時代」である。

こうした点を取り上げて今日の感覚から、差別的な意識から抜け出せていない、現実に目を向けていない、などと批判することはたやすいが、それもまた一面的な捉え方でしかない。明治の新時代に対する期待感と期せずして浮かび上がる暗部、敵国人に対する差別と同情、極めて型に嵌った「お約束」の趣向とドラマとしての新境地など、多くの相反する要素を抱え込みつつ、演出的にも当時としての最新の技術を次々と導入していった点にこそ、これらの戦争劇の興味深さがあるのであり、明治期に形作られた国家体制の延長上にある社会に暮らす私たちにとっても、参照すべき価値があるのである。

『明治年間東日記』（草双紙）

『明治年間東日記』は、明治八年（一八七五）六月三日から東京・新富座において上演された。立作者は二代目河竹新七のちの黙阿弥である。主な出演者は、五代目坂東彦三郎（上野の院主・東雲、清水谷之丞、幸七叔父喜平次）、四代目中村芝翫（鬼蔦の伝五郎、大仏六郎）、初代市川左団次（覚禅坊、蟒の九蔵）、五代目尾上菊五郎（轟坂五郎、手代幸七）、四代目中村翫雀（汐沢覚之進）など。台本の現存は確認できず、ここでは舞台を元にしたいわゆる正本写草双紙（合巻）の影印および翻刻を掲載した。

正本写は、歌舞伎の内容を草双紙（合巻）化したものであり、文化年間（一八〇四～一八）に始まり、初めは戯作者によって書かれたが、幕末期には劇場内部の狂言作者が執筆する例も多くなる。[1] 明治維新の混乱によって

一度は出版が途絶えたが、本作上演に先立って明治八年正月に新富座で上演された『扇音同大岡政談』が、竹柴琴咲（狂言作者・竹柴金作のちの三代目河竹新七）作『天一坊大岡政談』として刊行されたのを嚆矢として、新富座の上演作品が続けて刊行されるようになったという。[12]『明治年間東日記』はその第二作であり、作者は笑門舎福来、画は表紙に「豊原国周筆」、上巻見返しに「周義筆」、中巻見返しに「国まさゑかく」とあり、豊原国周、豊原周義、梅堂国政の合作と思われる（国周は表紙のみを描いたか）。版元は若狭屋甚五郎（若栄堂）である。幕末までの正本写と比較すると、彫りの技術が劣っており、本文にも粗雑な点が目立つが、幕末・明治期の最重要作者・黙阿弥が原作を執筆しており、内容的にも興味深い点が多いので、取り上げた。

本作は、慶応四年＝明治元年の上野戦争を序幕に置き、以下、一年につき一幕で上演が行われた明治八年までを八幕で描くという趣向になっている。どの幕にも社会的な出来事が配され、大詰の八幕目、すなわち「現在」の場面は上野に彰義隊の祈念碑が建立され、戦争に関係する人々が集う場面であり、上演に近い時期の新聞では、実際に上野に彰義隊の祈念碑が建立されたことが報じられている（祈念碑は現在も上野公園内に残る）。草双紙の内容、現存しない台本を読んでいたことが予想される渥美清太郎による梗概、[13]番付等から、各幕で取り上げられた出来事を挙げると、以下の通りとなる。

序　幕（明治元年）　上野戦争
二幕目（明治二年）　箱館戦争
三幕目（明治三年）　関所廃止令（史実では一年）
四幕目（明治四年）　身分解放令
五幕目（明治五年）　娼妓解放令
六幕目（明治六年）　敵討禁止令
　　撃剣興行（榊原鍵吉の撃剣会発足）
七幕目（明治七年）　谷中天王寺墓地の東京府共同墓地化
八幕目（明治八年）　彰義隊祈念碑建立

これを見ると、本作が戦争劇という以上に、「戦後社会」とそこに生きる人々を描いた芝居であることがわかる。黙阿弥はこれ以前、明治五年（一八七二）に三代目瀬川

如皐作『与話情浮名横櫛』の書き換えで、はっきりと舞台が明治であることは示さないものの、それを仄めかす『月宴升毬栗』を書き、さらに六年には新聞というメディアの登場や散髪脱刀令を取り入れ、新時代に適応できない士族を主人公とした『東京日新聞』、七年にはやはり士族などが登場する『繰返開花婦見月』を書き、明治の新たな風俗を描く散切物の創作を開始していた。この三作品はいずれも守田座で上演されている。江戸三座の一つであった守田座は、東京府が従来の浅草猿若町以外への劇場設置を認めたことを受け、いち早く明治五年に新富町への移転を果たす。十月に行われた新富町での開場興行で上演されたのが、『月宴升毬栗』である。新たな出発とともに散切物という新機軸を打ち出した背景には、座元・十二代目守田勘弥の意向もあったはずである。そして、八年正月から同座は所在地にちなんで新富座と改称した。『明治年間東日記』は、そこで上演されたのである（正本写の序文では、いまだに「守田座」の名が使われている）。

渥美は「趣向はなかなか巧みであつたが、時相が混乱していたので成功しなかつた」[14]と記しており、田村成義編『続続歌舞伎年代記　乾巻』にも「余り面白くなく不評のかたちなりしが中幕に翫雀下阪のお名残りとして鳴門のお弓を演じ彦三郎の十郎兵衛と倶に評能く」[15]とあるように、同時に上演された『けいせい阿波の鳴戸』の方が、中村翫雀（初代鴈治郎の実父）が大阪へ帰るお名残りという話題性もあって好評であったようである。なお、『明治年間東日記』の末尾で、翫雀が演じた汐沢覚之進が、大阪に赴任することになったと言い、人々に別れを告げるのは、翫雀の帰阪を当て込んだ楽屋落ちである。

上演時には不評であったとはいえ、渥美も記す通り、全幕に実際の社会的な出来事を盛り込み、筋を通した手際は巧みである。上野戦争の場面での清水山三郎の最期の様子や、史実における輪王寺宮（北白川宮能久親王）の上野からの脱出のさま、大詰を「現在」として上野戦争の関係者が再会するという趣向などは、其水の『皐月晴上野朝風』に影響を与えている[16]。また、本作でその撃剣興行の模様が描かれる剣術家・榊原鍵吉は、輪王寺宮の逃亡の際に護衛を務めたといわれ、明治期には撃剣会を組織して剣術試合を興行化することで、文明開化のなかで衰退しつつあった剣術を再び隆盛へと導いた。『皐

月晴上野朝風』では、榊原が輪王寺宮の脱出を助けるさまが描かれる（明治二十三年時点で、榊原、北白川宮とも存命だったためか、高木原源吉と上野の僧光仁の名で登場する）。また、黙阿弥は代表作の一つ『天衣紛上野初花（くもにまごうえののはつはな）』のなかに、登場人物の一人・金子市之丞が湯島天神で剣術の奉納試合を行う場面を仕組んでいるが、ここにも榊原の撃剣会の面影がある。

十五年後に弟子の其水が書いた『皐月晴上野朝風』と比較した際に目に付く本作の特色は、天野八郎らが実名で登場する其水作品に対して、登場人物を実名で描かず、登場人物にモデルとなった人物がいる場合も、人物とモデルとが一対一では対応しないことである。轟坂五郎は、戦場から落ち延び、潜伏しているところを捕縛されるところから、天野八郎をモデルとしていることが窺えるが、同じく彰義隊士の渋沢平九郎（実業家・渋沢栄一の従兄弟）を思わせる点もあり、獄中死した天野と違い、警官となるという設定も、彰義隊士から警官となった人物が実際にいたことを反映していると思われる。[17] 黙阿弥による最初の上野戦争劇『狭間軍紀成海録』では、桶狭間の戦いに仮託する形をとっていたことを考えると、上野という地名などが明示されている点では、本作は現実をそのまま描く方向へ進んでいるといえるが、それでも実在の人物を実名で登場させることができなかったのは、明治八年時点ではいまだ存命の関係者も多かったことなどに配慮したものであろうか。

なお、錦絵の場合も英斎「春永本能寺合戦」（明治元年刊）、さくら坊芳盛「本能寺合戦之図」（二年刊）、歌川芳虎「信長公延暦寺焼討ノ図」（四年刊）など明治初年の作品が、いずれも本能寺の変に偽装した題名が付けられているのに対して、明治七年（一八七四）頃から月岡芳年「東叡山文殊楼焼討之図　慶応戊辰五月十五日」「東台山王山戦争之図」（いずれも七年刊）など上野戦争を描いていることを明示した作品が現れる。[18] 戦争表象の変遷については、ジャンル横断的に考えていく必要があるだろう。

先述したように、明治元年から八年までの社会的な出来事を巧みに盛り込んだ本作だが、なかでも異彩を放っているのは、従来「穢多」「非人」などと呼ばれた非差別民の身分を廃して、平民同様とした明治四年八月二十八日（一八七一年十月十二日）の太政官布告第四四九号、いわゆる身分解放令（賤民廃止令）を当て込んだ、松屋の

手代・幸七に関わる筋であろう。幸七は東海道石部宿（現・滋賀県湖南市）の出身で、伊勢参りの道中に石部を通った松屋の主人に引き取られて手代となったが、実は非差別民であった。上野戦争の混乱のなかで主人が殺害されたのちも、幸七は零落する主人の妻と娘を支えるが、娘は貧苦のなかで吉原に身を売る。松屋の後家は、娘と幸七を夫婦にして店を再興しようと考えるが、これによって幸七はこれまで隠していた自分の出自を打ち明けねばならなくなる。彼が非差別民であることを知った吉原の若い衆に打擲を受けた幸七は、叔父の家へ逃れるが、そこで身分解放令が発せられたことを知るのである。

幸七に対する吉原の者たちの容赦ない暴力[19]や、叔父喜平が通行人から提灯の火を請われ、火打箱を貸したところ（非差別民の家の火を穢れとして、貸し借りを禁じたことによるか）、差別的な発言を受け、幸七ともども身の上を嘆く場面などは、明治初頭の差別の実態を生々しく描き出している。喜平の家は、表に「白かう、赤こう」（白膏、赤膏であろう）の看板を掲げているが、これも非差別民に医薬業に従事する者が多く、非差別民の作る膏薬が極めて効能の高いものと一部で考えられていたことを反映

『明治年間東日記』（豊原国周画）
手代幸七（五代目尾上菊五郎）は伝五郎（四代目中村芝翫）らによって折檻される。

しているかと思われる。[20] 幸七を石部宿の出としたのも、それらのイメージから売薬で知られた石部の地名を出したものかもしれない。

結局、幸七は身分解放令によって自由となり、遊女となっていた松屋の娘・おちよも、娼妓解放令（明治五年十月二日〈一八七二年十一月二日〉太政官布告第二九五号）によって、遊女の身分を脱し、二人は夫婦となる。しかし、現実には身分解放令や娼妓解放令は、真に非差別民や娼妓を「解放」したとは言いがたい。以後もかつての被差別民に対する差別が姿を消したわけではなく。娼妓たちはむしろ人身売買の結果ではなく、自らの意思で身を売っているという偏見にさらされることがしばしばあった。島崎藤村『破戒』よりも三十年も早く、若手花形である菊五郎に被差別民の役を与えて、その葛藤を描いた点で本作には高い価値を認めることができ、ここには、『会津産明治組重』で左団次が差別を受ける清国人を演じたことへつながる発想がすでに確認できるわけだが、一方で本作に登場する身分解放令と娼妓解放令は、そうした事実に目を向けず、現実を離れた「理想」を描いているのである。

そのような姿勢は、大詰にも見ることができる。新政府軍の隊長だった汐沢覚之進は、旧彰義隊士でかつては敵味方に分かれた清水谷之丞に妹を嫁がせている。そこへやはりかつての彰義隊士である大仏六郎と轟坂五郎が現れ、清水の家に奉公していたおさわが轟の妹であったことが発覚し、清水の仲介で汐沢とおさわは結婚することになり、「「揃いも揃ふ親族一家」「かゝるめでたき君が代に、幾千代かけて変はりなく」、皆喜びの大入はめでたかりける芝居なり」（本書一〇二頁）と物語は結ばれる。かつての敵味方が文字通り「家族」となり、近代国家日本（と新富座の芝居）の平和と繁栄が寿がれるわけだが、この場面も今日の目から見れば、藩閥争いなどによる新政府内部の対立等の事情から目を背けており（すでにこの時点で西郷は下野しており、六年後にも明治十四年の政変で大隈重信らが政府を追われる）、また、女性本人の意思を排除した男性論理による支配の構図が透けて見える。

このように、本作が当時の社会に存在した有形無形の「現実」を完全に直視することなく「理想」を描いた点に、同時代の人々の新時代に対する期待感や、それとは裏腹に、早くもこの時点で近代日本が抱えていたさまざまな

『明治年間東日記』（豊原国周画）
上野の祈念碑の前に上野戦争に関わった人々が再び集まる。

問題が浮かび上がる。それは私たちにとっても無縁の話ではない。

『日本大勝利』

『日本大勝利』は明治二十七年（一八九四）九月十一日から東京・春木座で初演された日清戦争劇である。作者は三代目勝諺蔵（かつげんぞう）。主な出演者は、四代目中村駒之助（大富公使・超正玨・張之洞）、三代目中村富十郎（金玉均夫人兪氏）、七代目市川八百蔵のちの七代目中車（豊島大尉・勝崎大尉）、二代目中村雀右衛門（福鋹・大城少将）、四代目中村芝翫（富士島中佐）など。

翻刻の底本は、大阪府立中之島図書館所蔵（請求記号252-82）。半紙本六冊を、序幕から三幕目と四幕目から大詰の三冊ずつに分けて合綴し、それぞれ表紙を付している。各冊に「勝諺蔵著作之印」「勝諺蔵所蔵印」の印があり、三代目勝諺蔵自筆かと思われる。

三代目勝諺蔵は、弘化元年（一八四五）、江戸・浅草諏訪町で生まれた[21]。父は黙阿弥の高弟・河竹能進（のうしん）（二代目勝諺蔵）であるが、黙阿弥への入門は嘉永七年（一八五四）である。諺蔵生誕の頃の能進は、一度黙阿弥に入門を断

られ、戯作者・三亭春馬の弟子となるなどしていた時期であったと思われる。[22] 能進は息子にはかつての家業であった提灯屋を継がせようとしたようだが、[23] 諺蔵もまた狂言作者を志し、瀬川如皐に入門してしまう。

浜彦助を名乗って中村座の番付に名前を載せるのは、文久二年（一八六二）正月からである。尾澤良三は明治初年までの彦助について、吃音を抱えていたことも関係して、「遅々とした出世の段階であつた」とし、「頤使に甘んじてゐた狂言方」であったと記す。[24] しかし、明治二年（一八六九）九月に仮名垣魯文らが、浅草寺に山東京伝の机塚を再建しようとした際に行った書画会の摺物「机塚起立書画会筵」に、「会幹」の如皐、其水（黙阿弥の俳名）以下、数名の狂言作者が名を連ねるなかに彦助の名が見え、四年正月中村座の『薪曲輪七種紋日（しんくるわななくさもんび）』では、清水賞七、如皐とともに四立目の執筆を担当している[25] ことなどを考えると、明治四年頃にはすでに、軽い場面の執筆程度は任され、狂言作者の世界でもある程度認知された存在であったと考えるべきであろう。

彼にとって転機となったのは、大阪への移住である。父・能進は五年正月から大阪の芝居の番付に名前を見せるが、諺蔵は父から少々遅れて大阪へ移ったらしく、番付上の初出は六年九月の若太夫芝居である。以後、父と合作しつつ、大阪の狂言作者の第一人者となっていく。十一年（一八七八）三月に勝諺蔵を襲名した。[26]

本作が執筆されたのは、諺蔵が再び東京に戻り、本郷にあった春木座の立作者となっていた時期である。春木座は明治二十三年（一八九〇）六月二十三日に類焼し、翌年十二月まで一年半近く興行ができなかった。翌二十五年二月興行の番付から、諺蔵の名が見えるようになるのだが、実際に彼が上京したのは二十六年三月だったらしい。二十六年四月四日『東京朝日新聞』掲載の竹の屋主人（饗庭篁村）の劇評が、「作者竹柴諺蔵丈、大阪に居て此に立作りの地位に坐り、一番大阪作者のを見て呉れといふ書物。いかに便利でも役者は東京大阪と両股に踏れねど、作者には此便利名誉あり」と称賛するように、それまでの諺蔵は大阪の劇場に出勤しつつ、東京の春木座の立作者の地位をも兼ねていた。[27]

日清戦争が勃発し、諺蔵が『日本大勝利』を執筆したのは、この実際の上京の翌年だった。大阪でも依然として諺蔵の名声は高く、春木座での上演の翌十月には、

大阪・弁天座でも上演されている。なお、諺蔵は明治三十四年（一九〇一）七月に再び大阪に移り、翌年十月二十七日に没した。

本作では、駐朝日本公使・大鳥圭介による朝鮮政府に対する内政改革の最後通牒（七月二十日）、日本軍による王宮の占領（同二十三日）、豊島沖海戦（同二十五日）、成歓の戦い（同二十九日）といった日清戦争開戦の直前から序盤にかけての出来事（ただし日清両国が互いに正式な宣戦布告を行うのは八月一日である）が描かれている。日清戦争劇の上演は、本書にも収めた川上音二郎一座の『壮絶快絶日清戦争』（東京・浅草座）が八月三十一日初日ともっとも早く、福井茂兵衛一座（京都・常磐座）、佐藤歳三一座（横浜・勇座）、山口定雄一座（横浜・蔦座）など新演劇が先行したが、歌舞伎でもっとも早く上演されたのが、九月十一日初日の本作である。

作中には実在の人物が多数登場するが、李鴻章、袁世凱、福錕、李允用といった清および朝鮮の人物が実名で登場するのに対して、日本人の登場人物の実名使用は避けられている。主要な登場人物とそのモデルとの対応関係を記すと以下のようになる（肩書きは当時のもの）。

大富公使＝大鳥圭介（駐朝日本公使）
大城少将＝大島義昌（陸軍少将、混成第九旅団長）
富士島中佐＝福島安正（陸軍中佐、第一軍参謀）
勝崎大尉＝松崎直臣（陸軍大尉、歩兵第二十一連隊第十二中隊長）

彼らの名は新聞や錦絵等で広く知られていたが、本作が実名を用いていないのは、無用のトラブルを恐れたものであろうか。なお、朝鮮人でも金玉均（劇中には登場しない）は台本では実名であるものの、春木座の番付では「千玉均」、弁天座では「銀玉晋」となっており、金玉均を殺害した洪鐘宇も弁天座では「降渚運」という役名に変えられている。日本で十年以上の亡命生活を送り、日本でもその死が悼まれた金玉均の場合も、実名の使用が憚られたのかもしれない。

本作の芝居としての見どころは、大富（大鳥）公使が理路整然と李容植や袁世凱を論破する弁舌の爽やかさ（序幕）、金玉均の家族の悲惨な境遇（二幕目）、豊島沖海戦における日本海軍の活躍（三幕目）、成歓に近い安城渡

における勝崎（松崎）大尉の最期（五幕目）といった場面であろう。日清戦争にまつわる「美談」は、新聞紙上や錦絵等で盛んに喧伝されたが、本作ではそれらが生身の人間によって、観客の目の前で再現されたのである。本書表紙に用いた豊原国周「松崎大尉進撃図」も、安城渡の戦いを題材にしたものであり、松崎大尉は菊五郎の似顔で描かれている。なお、成歓の戦いでは、戦闘中に被弾して絶命しても、口からラッパを離さなかった喇叭手（当初は白神源次郎とされたが、後に木口小平であったことがわかった）の逸話がのちに修身教科書に掲載されるなど広く知れ渡ったが、本作には描かれていない。

作中では、日本の軍人たちの勇敢さや正々堂々とした態度と、清国の軍人や政治家、朝鮮の守旧派の卑怯さがそれぞれ強調され、日清戦争が「正義の戦争」であることが主張されている。三幕目の豊島沖海戦では清の長官・洪偕元が降参を装って日本軍に不意打ちを仕掛けるのに対して（大阪・弁天座の上演ではさらに英国人船長を脅迫する場面があったらしい）、日本側は敵兵を救助しており、五・六幕目の成歓の戦いでも、日本の軍人が勇敢な戦いぶりを見せる一方で、清国軍は規律が乱れており、総督の葉志超らも民間人に変装して逃亡を図る。軍人の場合は、戦闘における敗北という結果が待ち受けているわけだが、軍人以外でも、開化派であり日本寄りの立場であった金玉均を暗殺し、その家族をも苦しめる洪鐘宇、いち早く朝鮮から脱出した袁世凱や、敗戦の情報を隠蔽しようとした李鴻章といった人物たちも、最終的に失脚することになる。本作は徹底的に、「善」なる日本が、「悪」である清・朝鮮守旧派を倒し、朝鮮の開化派を助けて、朝鮮の独立を保証する、という勧善懲悪の図式によって成り立っているのである。これを陳腐な構図として批判することは容易いが、それよりも古今東西の演劇、もしくは芸術作品全般における戦争表象のあり方や、そこでどのように一方の当事者の立場が正当化されているのか、といった視点から本作を見ていった方が、生産的であろう。なお、清国側で唯一、立派な軍人として描かれるのが、海軍参謀の趙正玨だが、彼の説く理屈は味方に受け入れられない。「愚かしい」味方の中で孤軍奮闘する英雄という人物像には、文禄・慶長の乱を日本側の視点から描いた文芸における李舜臣の面影が感じられる。彼らの存在もまた、日本側の正当性を強調するものとい

えよう。

弁天座では、三代目中村福助（二代目梅玉）が大富公使、中村珊瑚郎が銀玉晋父・李鴻操・富貴島（富士島）中佐、三代目片岡我童（十代目仁左衛門）が英人ガルスヲーンド・福錕・大城少将、初代中村鴈治郎が千度見海軍大尉（豊島大尉に相当）・張之洞・勝崎大尉などの配役であった。

『会津産明治組重』

『会津産明治組重』は、明治二十七年（一八九四）十月五日から、東京・明治座で上演された。全七幕で、途中に中幕『日本誉朝鮮新話（にほんのほまれちょうせんしんわ）』を挟む。立作者は竹柴其水で、底本裏表紙の署名によると、其水自身が三幕目・中幕・六幕目・七幕目、三代目河竹新七が二幕目と五幕目、竹柴金松が序幕、竹柴彦作が四幕目を分担している。[28] 主な出演者は、明治座の座元でもあった初代市川左団次（馬丁金太郎、桑折堅蔵、清国人道昌恵、士官北野勇進）、五代目市川小団次（お竹、世話役勝五郎、士官東国輝）、二代目坂東秀調（桑折堅蔵妻お節、金太郎妹おぎん）、五代目市川寿美蔵（中間久六実ハ進藤勇助、差配人長兵衛）、市川権十郎（桑折良介、会津庵四郎兵衛、士官、平壌輔、人見明）、七代目市川八百蔵のちの七代目中車（士官天城峰雄、清国人拝正漢）など。中幕では左団次が毛谷村六助後ニ貴田孫兵衛、権十郎が木村又蔵重政、小団次が傘の一本足の化物を演じた。

翻刻の底本は、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵（請求記号ハ24-1～8）。すべて半紙本で、表に「当ル廿七年九月狂言／会津産明治組重／八冊／日本誉朝鮮新話／一冊」、裏面に「本主　岡田」と記された袋が付属している。岡田は其水の本名（岡田進蔵）である。六幕目のみ筆跡の異なる別本（ハ24-2）があり、冒頭の「大同江陸軍戦の場」は別本にのみ記されている。実際の興行でもこの場面は上演されたと考えられるので、別本も不完全な本文ではあるが、底本を補う形で翻刻した。「大同江陸軍戦の場」以外の本文に大きな異同はない。

なお、演劇博物館には他に横本が所蔵されている（請求記号ハ78-1～8）。河竹繁俊によれば、狂言作者の筆記による台本は、まず草稿として横本が作成され、のちに縦本（通常は半紙本）に決定稿が浄書されるという。[29] 本作の場合も底本として採用した縦本が決定稿と思われ、各冊に警視庁による検閲印（明治二十七年九月二十八日付）

『都新聞附録　明治座十月狂言筋書』

が押印されている。ただし、随所に訂正や削除の痕があり、六幕目末尾には「世九年十月賑座」と記されているため、横浜・賑座で再演が行われ、そのためにこれらの修正がなされた可能性がある。[30] また、先述の通り底本の七幕目では、左団次演じる道昌恵が測量活動を行っていて捕縛されるが、筋書、劇評等によれば、実際の上演では、拝正漢という別の人物になっており、八百蔵が演じた。

立作者の竹柴其水は、弘化四年（一八四七）生まれ。河竹能進や本作でも合作を行った三代目新七と並ぶ黙阿弥の高弟の一人であり、師没後の河竹家を献身的に支えたことで知られる。[31] 現在では、黙阿弥が一部を補作したと伝えられる『神明恵和合取組（かみのめぐみわごうのとりくみ）』がしばしば上演されている。本作上演当時は明治座の立作者として左団次の主演作品を執筆していた。

先述の横本には、各幕の設定上の日付が記されている。それに従って全幕の構成を示すと次のようになる。

序　幕　若松城下稲荷の場／長局烈女血判の場＝慶応四年二月下旬三ノ午
二幕目　桑折屋舗決別の場＝明治元年九月九日
三幕目　滝沢村松並木の場／天寧山頂上の場／御城内奥御殿の場／戦地仮病院室の場／東山天寧寺前の場＝明治元年九月二十一日
中　幕　『日本誉朝鮮新話』毛谷村御手洗の場／彦山権現内陣の場＝天正十九年九月十五日
四幕目　浅草寺奥山茶店の場／本町薬種屋奥の場＝明治三年九月二十一日

五幕目　本石町蕎麦屋の場／本町薬種問屋の場＝明治三年十月
六幕目　大同江陸軍戦の場／旅順口海軍戦の場＝明治廿七年九月十六日
　　入船町貸長家の場＝同八月
七幕目　相模教心寺山の場／浜離宮汐先橋の場／新橋ステーションの場＝明治廿七年八月

このように、本作では序幕から三幕目までに明治元年（慶応四年）の会津戦争が描かれ、毛谷村六助が豊臣秀吉の朝鮮出兵への参加を決めるという常磐津の舞踊劇『日本誉朝鮮新話』を挟んで、四・五幕目で明治三年の東京での出来事、六・七幕目で「現在」である明治二十七年の出来事が描かれている。前半に戦争の場面を置き、そこに関係した人々の「戦後」を描く点、黙阿弥の『明治年間東日記』からの影響が窺えるが、上演時の「現在」において新たな、しかも外国との戦争が勃発していたところにこの作品の特色がある。

『明治年間東日記』など黙阿弥からの影響ということでっは、すでに指摘した通り、人気役者に差別を受ける側の人間の役を割り振り、葛藤を描いた点があり、五幕目で騙りが露見したお竹と金太郎が居直る様子についても、饗庭篁村による「弁天小僧の浜松屋そつくり」[32]という評がある。篁村は二人の騙りの手法自体についても、曲亭馬琴の読本『新局玉石童子訓』（弘化二～五年〈一八四六～八〉刊）や三遊亭円朝の人情噺『蝦夷錦故郷之家土産』（速記本は明治二十一年〈一八八八〉刊）ですでに用いられているものであると指摘しているが[33]、戦場から逃亡し、こうした悪事に手を染めるきっかけには、黙阿弥の影響が感じられる。

ト抱上ゲやうとする。爰へ又一発音して、金太郎ぐるみ引くり返り、三代治苦しみ、烟りの中にて落ち入る。両人こわ〴〵進寄、掛行燈の灯りに顔を覗き込み、ぎよつと思入有て。

金太　お顔も真ツ黒、ゑんせうにて ○
ト震へる。是にて病に成りし思入にて、こわ〴〵下手へ這ひ出し、震へる。本釣鐘、誂らへの合方に成り。

お竹どん、けふ迄主人へ恩返しに命を捨てもお手伝をする気で戦地へ出掛たが、此有さまに身の毛立テ、襟にひいやり億病風、吹込むとたんに心が替り、命を捨るはおしく成た。

竹　今迄きれいなお嬢さんが、只一発で相好変り、忠義もしれない戦地の犬死。言ば縁の下の力持。私しも実はぞつとして、今にも玉が飛で来るかと、斯して居て冷〳〵するのさ。

金太　夫じやア、いつそ焼ぼつくひ、一旦切れた弐人りが中も、又も結んでお嬢さんの此遺言の旅用の金で、一ト先江戸へ逃ると仕やうか。

（本書二一九頁）

のちにお竹に死なれ（死因は明治十一年のコレラ流行だったという）、零落した金太郎は、すぐ側にいた三代治が撃たれ、悪心が再び起こった瞬間のことを「仮病院で看護婦が一発やられたひゞきから、病風にさそはれたも、女に心引かされて、ついには色と欲とに迷ひ、うつかり踏込ム脇道に〔以下略〕」（本書三〇二頁）と回想する。一度はお竹との関係を断ち、会津のためにいくさに貢献しようと決意した金太郎の心を変えたのは、一瞬にして人の命を奪う、鉄砲の「ひゞき」であった。何らかの「音」が、人物の心を大きく変えるという手法を黙阿弥は好み、しばしば用いた。貧しい職人の自分と対照的な商人による豪遊のさまを眺めるうち、真っ当に働き続けることに嫌気が差した途端、「清正公様」から響いてきた題目太鼓の音に突き動かされるように盗賊鋳掛松への変身を決意する鋳掛屋松五郎（『船打込橋間白浪』）、誤って殺人を犯し、自責の念から死のうとした瞬間、賑やかな騒ぎ唄を耳にして盗賊・鬼薊清吉へと変貌する清心（『小袖曾我薊色縫』）、貧窮する自分たちとは対照的に裕福な隣家から聞こえてくる清元の声を聞き一家心中を決意する筆売り幸兵衛（『水天宮利生深川』）などである。ここでも、一発の銃声が金太郎の運命を動かしたのだった。

先述の清国人が測量中に捕縛される場面は、九月十一日の『東京朝日新聞』で報じられている、観音崎で不審な清国人が逮捕された事件を踏まえているとみられ[34]、開戦によって清国人が続々と帰国していたことも、当時の新聞に見える。左団次は新富町に住んでいた林玉昌という清国人が帰国に際して、妻としていた日本人女性の

もとに残していった衣服を舞台で身につけたとも報じられている。[35] 他にも、金太郎や四郎兵衛が大陸へ渡って清国との戦争に協力しようとするのは、劇中にも登場する大倉組（翻刻では大蔵組）等の斡旋により多くの「軍夫」が日清戦争に参加していた事実を反映しており、あたかも白虎隊のような格好をした旧会津藩士が軍夫のなかに含まれていたことも、当時報じられている。本作にはそうした風聞が数多く取り入れられているのである。

なお、天正十九年（一五九一）に設定された中幕は、浄瑠璃『彦山権現誓助剣』で知られる毛谷村六助が、化物を退治し、木村又蔵との力比べの末、加藤正清の家臣となる内容であるが、秀吉による朝鮮出兵をまさに朝鮮半島で戦われていた「現在」の戦争に重ねる意図は明らかである。近代の小説において、しばしば日清戦争等と秀吉の朝鮮出兵のイメージが重ねられたことについては指摘があるが、[36] 演劇の場合も、明治十五年（一八八二）の壬午事変に際して、黙阿弥は朝鮮での騒乱を、やはり朝鮮出兵に仮託して描いているし、[37] 日露戦争中の明治三十七年（一九〇四）九月には東京座で日清戦争を背景にした『不如帰』とともに、『彦山権現誓助剣』の続編で朝鮮が舞台になる浄瑠璃『太功艶書合』が義太夫狂言として上演されている。同作の歌舞伎での上演はおそらく近世期も含めこれが唯一である。東京座では同じ年の三月に、坪内逍遥作『桐一葉』初演が行われており、対外戦争と太閤記物・朝鮮軍記物とのイメージを重ね合わせることは一般的であったといえよう。なお、化物退治のくだりは台本の訂正のために判読困難な箇所が多いが、傘の一本足の化物の登場などは、のちに三代目新七が菊五郎に書き与えた舞踊劇『闇梅百物語』（明治三十三年〈一九〇〇〉一月、歌舞伎座）を思わせる。

『壮絶快絶 日清戦争』

明治二十七年（一八九四）七月二十五日に豊島沖海戦、二十九日に成歓の戦いが行われ、八月一日に正式な宣戦布告がなされた日清戦争を、いち早く演劇化したのが、この新演劇の川上音二郎一座による『壮絶快絶 日清戦争』である。作者は藤沢浅次郎（浅二郎）。出演者は、川上音二郎（新聞記者比良田鉄哉、軍医熊坂弘）、藤沢浅次郎（新聞記者水澤恭二）、岩尾慶三郎（堀慶子、牢番劉昌和実ハ日本人秋山桂蔵）、小織桂一郎（支那関門主魏崇金、海軍少将岸田紋二）、

高田実（李鴻章、海軍大尉大和義輝）、石田信夫（春田しげ子）、伊井蓉峰（陸軍中佐脇田亮）など。大当りをとったことは日本演劇史上に名高い。近年の研究では、歌舞伎と新演劇の俳優の身体の違いに注目し、型に即した演技を基本とする歌舞伎俳優の演技術を、行進を始めとする近代的な軍隊の動作に応用することの困難を説いたものが目立つが[38]、埋忠美沙は西南戦争劇『西南雲晴朝東風』における演技について検討した上で、そうした見方には再考の余地があるとしている[39]。

底本は、早稲田大学坪内博士演劇博物館所蔵（請求記号ロ16-1121-1～7）。七冊から成り、それぞれの表紙には、『日清戦争』の題名と、以下の場名が記されている。

第壱　黄河口日軍々営の場
二幕目　北京城外関門の場
第参　支那中央電信局の場
第四　北京城内軍獄の場
第五　李将軍面前痛論の場
大詰　日軍大進撃の場
日清戦争脚本ノ内訂正削除

一冊目表紙には明治二十七年八月二十五日付で検閲許可の印（検閲官は「大久保」）が押印されており、台本の訂正箇所を列挙した七冊目の「訂正削除」の冒頭にも九月四日付の警視庁による検査済印と「原田」の印が押されており、各冊に訂正箇所が存在する。上演前、あるいは興行開始直後の修正の痕跡をとどめたものと見られるので、可能な限り訂正前と訂正後の両方の文字を翻刻するよう努めた。なお、六冊目にも追加の場面と思われる内容を記した罫紙が添付されている。

浅草座の番付にも場割が記されており、以下のようになっている。

（1）黄河口日軍軍営
（2）新聞記者於戦地救少女之急
（3）天津関門ニ臨時ノ警衛
（4）天津野外之戦闘
（5）北京中央電信局
（6）北京市街之火災附記者之遭難
（7）北京城内軍獄比良田水澤之慷慨

（8）李将軍面前記者之痛論
（9）渤海湾海戦清艦之沈没
（10）渤海波濤尉官ノ涙
（11）日軍大進撃秋山桂蔵之節義
（12）日清之噴闘
（13）大日本軍隊之武勇

先に示した台本の場割と比較すると、第壱が（1）（2）、二幕目が（3）（4）、第参が（5）（6）、第四が（7）、第五が（8）、大詰が（11）（12）（13）に相当するが、（9）（10）の海戦の場面に当たる場面が台本には見えない。上演時の劇評からは、海戦場面が実際に上演されたことは確実であるから、第五と大詰の間にあった一冊が欠落したものと思われる。

本作について松本伸子は、川上がフランス・パリのシャトレ座で観劇したジュール・ヴェルヌ原作・アドルフ・デネリー脚色『ミシェル・ストロゴフ』（Michel Strogoff）および、デネリー作『北京占領』（La Prise de Pékin）を綯い交ぜにして翻案したものだとした。[40] これに対して、井上理恵は川上の洋行日程を考証し、『ミシェル・ストロゴフ』を目にした可能性を否定した上で、[41] 本作は「シャトレ座の「北京占領」を上手に利用して余計なものは省き、日本バージョンの勇ましく実際的な舞台を生み出していた」[42]とする。

先述のように、歌舞伎と新演劇の俳優の身体性の違いという問題については、異論も出ているものの、本書に収めた歌舞伎の日清戦争劇二作品と比較すると、文字で読むだけでも、川上一座の『日清戦争』が簡潔で、スピード感ある舞台であったことは窺われる。

川上は本作上演後の十月に朝鮮に渡り、帰国後の十二月に市村座で『川上音二郎戦地見聞日記』を上演し、翌二十八年五月に『威海衛陥落』[43]で歌舞伎座に進出した。新演劇の川上は戦地を実見してきたことを売りにしたわけでが、明治二十九年（一八九六）の明治三陸地震津波の際には、新演劇の山口定雄一座が『大海嘯見聞実況』と題した芝居を上演しただけでなく、歌舞伎でも春木座で『三陸大海嘯』[44]を演じるのに先駆けて、主演の七代目澤村訥子と作者の勝諺蔵、勝進助が「実況視察の為」に岩手県へ赴いたという報道がなされた。[45] 歌舞伎、新演劇を問わず、「実況」はこの時期の演劇にとって重要な

概念である。さらにいえば、絵画においても日清戦争時には多くの画家が従軍画家として戦地に赴いており、中には『日清戦闘画報』の久保田米僊（くぼたべいせん）のように演劇との関係が深い者も含まれる。繰り返しになるが、明治期における戦争表象については、幅広いジャンルを横断的に検討していく必要があろう。

他にも、本作だけでなく、右に挙げた『三陸大海嘯』にも登場する赤十字と皇室、戦争、災害などのイメージの関係なども興味深い点であるが、ひとまず筆を措くこととする。

注

（1）壬午事変を題材とした芝居については、拙稿「時代と世話の「朝鮮事変」――河竹黙阿弥は壬午事変をどう描いたか」（井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版、二〇一六年）で論じている。

（2）Brandon, James R. *Kabuki's Forgotten War: 1931-1945*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2009.

（3）神山彰「明治の「風俗」と「戦争劇」の機能」『近代演劇の来歴――歌舞伎の「一身二生」』森話社、二〇〇六年、一六六頁。初出は『歌舞伎　研究と批評』第十二号、一九九三年）

（4）国立劇場調査養成部編『西南雲晴朝東風〔正本写合巻集・19〕』日本芸術文化振興会、二〇一七年。

（5）『日本戯曲全集　第三十二巻　河竹新七及竹柴其水集』春陽堂、一九二九年、七二一頁。

（6）岡本綺堂「日清戦争劇」『舞台』第八巻第九号、一九三七年九月。

（7）神山、注3前掲論文。

（8）拙稿「幕末・明治の芝居と災害」『変貌する時代のなかの歌舞伎　幕末・明治期歌舞伎史』笠間書院、二〇一六年。

（9）拙稿「日露戦争劇『敵国降伏』――歌舞伎の戦争劇と史劇の交点」（永田靖・上田洋子・内田健介編『歌舞伎と革命ロシア――一九二八年左団次一座訪ソ公演と日露演劇交流』森話社、二〇一七年）。

（10）『西南雲晴朝東風』上演時の団十郎演じる西郷への評価や、歌舞伎における西郷隆盛蔵の変遷などについては、注4前掲書解題および、埋忠美沙「歌舞伎の西郷隆盛」（『歌舞伎　研究と批評』第六十四号、二〇二〇年）に詳しい。

（11）正本写の歴史の概説や詳細な刊行年表は、佐藤悟著、国立劇場調査養成部編『正本写合巻年表〔正本写合巻集・別冊〕』（日本芸術文化振興会、二〇一一年）に収められている。

（12）佐藤悟「正本写略説」注11前掲書、三十八頁。

（13）国立劇場調査養成部調査資料課編『系統別歌舞伎戯曲解題　上巻』、日本芸術文化振興会、二〇〇九年。

（14）注13前掲書。

(15) 田村成義編『続続歌舞伎年代記　乾巻』市村座、一九二二年、一七三頁。
(16) 拙稿「上野戦争の芝居――黙阿弥・其水の作品を中心に――」（注8前掲書所収）。ただし、其水が『皐月晴上野朝風』の大詰に配した上野の内国勧業博覧会会場の場面は、時間の都合で上演されなかった。
(17) 注16前掲拙稿。
(18) 浮世絵の戦争画については、太田記念美術館監修、日野原健司著『戦争と浮世絵』（洋泉社、二〇一六年）が、ここで挙げたものも含め数多くの図版を用いて紹介している。
(19) 『徳川制度』には、「穢多」が「忍びて遊廓などに入りしことのもし露顕するときは、その家の畳・建具を新調すべき義務あるものとせりとかや」とあり（加藤貴校注『徳川制度　上』岩波書店、二〇一四年、三四五頁）、高木まどかは長崎丸山遊廓に非差別民が登楼して罰せられた事例について検討している（高木まどか「長崎丸山遊廓で捕縛された非差別民」『近世の遊廓と客――遊女評判記にみる作法と慣習――』吉川弘文館、二〇二一年）。近世の遊廓で非差別民が強く忌避されたのは事実であった。
(20) 斎藤洋一「近世の非差別民と医薬業・再考」『部落解放研究　部落解放・人権研究所紀要』第一五三号、二〇〇三年八月。根岸鎮衛の随筆『耳嚢』巻之二「人の油血薬となる事」には、ひびやあかぎれ、切傷などに、「穢多の元より出る膏薬妙なる由」が記されており、その膏薬には「人油」を用いたとある。非差別民が動物の皮革や脂を扱うことが多かったところからの偏見であろう。
(21) 『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』の死亡記事（いずれも明治三十五年〈一九〇二〉十月二十九日）による。
(22) 「故能進翁の履歴」『歌舞伎新報』第七一七号、一八八六年十一月五日。
(23) 『大阪毎日新聞』一九〇二年十月二十九日。
(24) 尾澤良三「勝諺造伝」『女形今昔譚　明治演劇史考』筑摩書房、一九四一年。
(25) 早稲田大学演劇博物館所蔵の台本（請求記号ロ16-186）裏表紙の記載による。

(26) 明治十七年（一八八四）六月からは、父が黙阿弥に許されて河竹姓を名乗ったのに合わせて、竹柴諺蔵とするが、黙阿弥が没した直後の二十六年（一八九三）四月からは勝姓に戻している。

(27) 拙稿「東京の中の「上方」――鳥熊芝居以降の春木座について――」（注8前掲書所収）。

(28) 竹柴金松は明治十四年（一八八一）暮れに黙阿弥に入門、翌年三月から新富座に出勤したと回想しているが（竹柴金松「旧師追憶談」『歌舞伎』第一七五号、一九一五年一月）、番付上は十四年三月新富座から名前が見える。竹柴彦作は同じく黙阿弥門下で、『歌舞伎新報』主筆の久保田彦作。

(29) 河竹繁俊『歌舞伎作者の研究』東京堂、一九四〇年、三七六～八頁。

(30) 賑座での再演の記録は、見出すことができていない。

(31) 河竹登志夫『作者の家　黙阿弥以後の人びと』講談社、一九八〇年（岩波現代文庫版、二〇〇一年）。

(32) 竹の屋主人（饗庭篁村）「明治座劇評（四）」『東京朝日新聞』一八九四年十月十四日。

(33) 竹の屋主人（饗庭篁村）「明治座劇評（二）」『東京朝日新聞』一八九四年十月十二日。

(34) 拙稿「「会津産明治組重」考――其水の日清戦争劇にみる黙阿弥の影響――」（注8前掲書所収）。

(35) 『東京朝日新聞』一八九四年十月十二日。

(36) 井上泰至「重ね合わされていく戦争のイメージ」（井上泰至・金時徳編『秀吉の対外戦争　変容する語りとイメージ』笠間書院、二〇一一年）、金時徳「太閤記物・朝鮮軍記物の近代」（佐伯真一・目黒将史・徳竹由明・松本真輔・金時徳編『日本と「異国」の合戦と文学――日本人にとって「異国」とは、合戦とは何か』笠間書院、二〇一二年）等。

(37) 注1前掲拙稿。

(38) 神山、注3前掲論文や兵藤裕己『演じられた近代〈国民〉の身体とパフォーマンス』岩波書店、二〇〇五年など。

(39) 埋忠、注4前掲書解題および「西南戦争における報道メディアとしての歌舞伎――日清戦争と対比して――」『演劇学論集日本演劇学会紀要』第六十二号、二〇一六年五月。

(40) 松本伸子『明治演劇史論』演劇出版社、一九八〇年、一八二～四頁。
(41) 井上理恵『川上音二郎と貞奴　明治の演劇はじまる』社会評論社、二〇一五年、一二〇～一頁。
(42) 同右
(43) 台本は早稲田大学演劇博物館所蔵（請求記号ロ 16-1123）。
(44) 台本は大阪府立中之島図書館所蔵（『大海嘯』請求記号 252-114）。
(45) 『都新聞』一八九六年七月七日。

明治期戦争劇集成

科学研究費補助金・若手研究
「歌舞伎と戦争に関する総合的研究」
2018 ～ 20 年度
JSPS 科研費　18K12295

2021 年 2 月 10 日　発行

編集・発行　日置　貴之
〒 168-8555
東京都杉並区永福 1-9-1
明治大学和泉キャンパス研究棟 303 号室

印刷　株式会社イシダ印刷
〒 534-0021
大阪府大阪市都島区都島本通 1-2-11